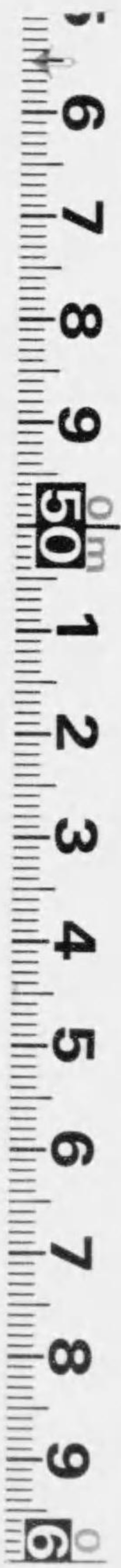


332
368



始



382
368

守士井上正賀著

變咲
詳說
蓄薇培養秘訣

東京
大學館發行



序

香水の精を造り出す可き薔薇の花は、また萬人を酔はすに
足るやうな艶麗なる容姿を持つておる。余はその艶たる姿
に見これつゝ、こゝ幾年かを之れが培養に費やして、さて
諸君に語る可き或る物を持つのである。余敢て薔薇通を以
て人に誇るに足る程の確信は持たぬにしても、少なくとも
そが變咲を培養する上に於て、多少の苦心を諸君の前に公
にする程の經驗を持つておる積りである。歐米の社交の花
家庭の花として日常欠く可からざる薔薇の花は、また我邦

1.11.2

内交

の庭に植えて益々改良進化を計ることは、目下の急務と考
えられるではないか、我邦が櫻の國、牡丹の國、百合の國
であるやうにまた薔薇の國としたいと思ふて、さてこそ余
の實驗を書いたものが本書である。諸君、余の何んでも通
がることを咎め賜ふな。

著 者 識

目 次

總 說

薔薇は四季の花である……………	一	薔薇の芳香……………	五
歐米の薔薇趣味……………	二	薔薇の變咲培養と我邦の風土……………	八
新時代と薔薇……………	四	家庭と薔薇……………	一〇
薔薇の特色……………	五		

第二話 薔薇の生理…………… 一二

草花栽培家と植物生理……………	一二	莖の作用……………	二三
葉の作用……………	一四	根の作用……………	二四
同化作用と日光……………	一五	花の作用……………	二七
同化作用と温度……………	一七	諸器官は共同に動く……………	三二
同化作用と水分……………	一九		

第三話 蓄薇の種類

種類と名稱の亂雑 三四
木性蓄薇 三六
蔓性蓄薇 五二

第四話 蓄薇と土質

變咲と土質 五九
理想的土質の性状 六三
理想的配合土 六五

第五話 蓄薇と燠炭

燠炭は農界の大問題 六七
變咲と燠炭 六八
蓄薇と燠炭 六九
燠炭の製法 七一
燠炭の効ある理由 七二
燠炭の養分吸收作用 七三
燠炭の溫度吸收作用 七五
燠炭は土地を膨軟にする 七七
燠炭は早害を防ぐ 七九

第六話 蓄薇と肥料

花の艶麗と肥料 八一
智利硝石 八四
硫酸アンモニア 八五
硝酸加里 八六
過磷酸石灰 八七
加里質肥料 八八
灰類 九〇
油粕 九一
糖及び鉄 九四
堆肥 九五
肉粉 九九
骨粉 九九
硫酸鐵 一〇〇

第七話 蓄薇變咲と施肥法

肥料は根際に施してはならぬ 一〇一
肥料は燠炭に混和して施すこと 一〇四
施肥の季節 一〇四
蓄薇の配合肥料 一〇七
燠炭配合肥料 一〇九

第八話 人工媒助法

花の雌雄蕊	一一二	人工媒助の結果	一一六
自然の花粉交雑	一一三	半ば人工的媒助法	一一七
人工媒助法	一一四		

第九話 實生養成法

遺傳の變異	一一九	疎植と培養秘訣	一二六
播種法	一二二	實蒔法と温室	一二七
床地の造り方	一二三	種子貯藏法	一二八
移植地の造り方	一二四	不完全種子と變映	一三〇
移植方法	一二四	實生の開花期	一三一
疎植のこと	一二五	實生速育法	一三二

第十話 薔薇接木法

接木法の來たす變化	一三五	切接法	一四二
接木の接着する理	一三七	挿接法	一四四
薔薇の砧木	一三九	皮接法	一四四
接穂の選定	一四一	割接法	一四六

第十一話 薔薇芽接法

芽接法の利益	一四八	芽接方法	一五二
芽接法の季節	一四九	丁字形芽接法	一五六
芽接法に用ゆる芽	一五〇	十字形芽接法	一五七

第十二話 薔薇の挿木法と分條法

挿木の時季	一五九	移植の床	一六三
挿木の要件	一六〇	移植の距離	一六四
挿木の床	一六一	嫩葉の移し方	一六五

挿木法の注意	一六五	分栽法	一六九
分條法	一六九		

第十三話 薔薇の移植法……………一七〇

薔薇の土地に順き易きこと	一七〇	移植の床	一七四
薔薇園の移植法	一七一	鉢植法	一七五
移植の方法	一七一	鉢植法と土焼鉢	一七六
移植の時期	一七二	薔薇園衰微を救ふ法	一七九

第十四話 薔薇變咲培養法……………一〇八

優等のものに虚弱である	一八〇	水分の施し方	一九一
培養位置	一八二	剪枝方法	一九三
肥培方法	一八九		

第十五話 薔薇名花培養法……………一九八

大鵬培養法……………一九九	醉美人培養法……………二〇五
金碧培養法……………二〇〇	銀世界培養法……………二〇六
鳴海培養法……………二〇一	楊貴妃培養法……………二〇七
秋津培養法……………二〇二	泰山白培養法……………二〇九
錦鷄培養法……………二〇二	王照君培養法……………二一〇
豊歳培養法……………二〇三	大平樂培養法……………二一一
泰平培養法……………二〇三	華寶殿培養法……………二一二
友鶴培養法……………二〇四	連城壁培養法……………二一三
第十六話 變咲培養と温室……………二一四	
草花と温室……………二一五	温室と人工媒助法……………二一七
薔薇の開花温度……………二一六	温室と質莖法……………二一八

雙咲 薔薇培養秘訣
詳説

農學士 井上正賀 述

總 説

牡丹の濃艶はなくとも百合の楚々たる風姿はなくとも氣高き淑女の胸に挿されて清き香と色と姿とに於て程能き調和の取れ得るものは薔薇を置いては他にない、花の芯の朱唇の如き花瓣に包まれたるその様は深き秘密を包める乙女の姿にも例ふ可きではないか、庭前に飾られたる鉢の數輪の薔薇はその覆郁たる香と生氣とを四周に與えるのである、紅、紫、黄、緑と數千百種の花の中でそ

の花の豊艶な點に於て四季に咲出づる點に於てその可憐と云ふよりも寧ろ愛し親しむ可き點に於て芳香高き點に於てその培養し易き點に於て蓄薇に勝るものは他にないのである、菊は艶麗なる點に於ては或は蓄薇に勝るであらうがその咲き出づる時期は主として秋に限られておることと、その栽培の方法が比較的困難であるとの點に於て蓄薇に劣つておると云はねばならぬ、「ダリア」の艶たる姿と朝顔の千變萬化する性とを以てしても芳香のなき點に於て到底蓄薇の敵ではない。

人或は歐米人の趣味を以て濃艶に過ぐるとするけれどもその清らかなる姿を現はせる蓄薇の本場は歐米であるのである、歐米人ほど蓄薇を好むものはないのである、歐米では如何なる宴會でも如何なる公衆の集會にでも吊賀一般の儀式にでも個人相互の交遊に至るまで蓄薇を見ないことはないのである、いや此

花なくしては事を欠くと云ふ有様である、吾等日本人たるもの何にも歐米人の真似をすると云ふわけではないが、歐米趣味の侵入とその風俗の輸入につれて近來頻りと蓄薇の流行都鄙を通じて盛んなるの勢ひの然からしむるところで、吾等は次に此趨勢に鞭ちて蓄薇熱を一層盛んならしめたいと考へて居る。人々よ草花趣味を一つの娛樂的の些事と考へてはならない、草花趣味の向ふところに由つてその時代の人心の變遷を知ることさえ出来るのである、花は櫻木人は武士と唱えて居つた武士道の盛んであつた過去の日本では、櫻花は確かに一代の人心の趣向を代表するものであつた、然かし世は時と共に遷り往いて主君の馬前に死することの無上の名譽とするの時代は過ぎ去つた如くに朝に開き夕にぱつと散り去る如き櫻花をのみ珍重するの時代は過去となつたのである、いや過去としなければならぬ、櫻花に比して遙かに艶麗であつて然かも

その開花期は極めて永く容易に落花せず、然かも芳ばしき香を放つ薔薇の花を新時代の人心を代表するものとす可きは必ずしも余の私言でないと思はれる。元來一つの時代の趣向は中々人力で左右することは出来ない、余が唱えなくとも遠く以前から新時代の波は、すでに薔薇の花を載せて彼岸に達しつつあるのである、新時代の要求は櫻花でもなく菊でもなくして濃麗なる諸種の西洋草花と共に薔薇のやうな性状を有する花に向つて進みつゝあるのである、丁度淡泊なる茶が濃厚なる興奮的の「コーヒ」に依つて代はらるゝ如くに菊の趣味は薔薇の趣味に由つて代はれつゝあるのである、薔薇は菊より濃厚である、もつと興奮的である、繼續的である、四時花が絶えないのである、吾等の仕事が繼續的であらねばならぬやうに、吾等の趣味の目的物たる花も繼續的のものであらねばならぬ、薔薇が奮闘的の歐米の人々に日常の眺めに供せらるゝと云ふの

は決して無意味ではないのである。

尙ほ薔薇の他の草花よりも廣く深く世人に愛好せらるゝ理由を列挙して見やうならば、

- 一、花の清艶にして愛す可きこと。
- 二、花に清香あること。
- 三、四季を通じて咲き出づること。
- 四、培養も繁殖も容易なること。
- 五、鉢植にも盛り花にも最も好適なること。
- 六、丈け高きもあり低きもあり木性もあり蔓性もあつてそれ〴〵目的に應じて應用に便利なること。

等であつてその花が如何に愛す可きものであつても或は馥郁たる香があつても

培養が容易でなければ到底廣く一般の人々の賞翫には適せないのである、
 或はまた花が美で香があつてその培養が容易であつてもその開花の時期が短か
 ければ之れまた廣く人々の賞翫には不適當である、花が美で香があつて培養
 も繁殖も容易で然かも四季を通じて開花し丈けの高さもあり低きもあり、鉢植
 にでも庭園にでも適し木性も蔓性もあつて花の「トネル」などを造るのに最も
 適すると云ふやうなものは薔薇を於ては他に見出すことは出来ぬのである、近
 來頻りと或る一部の人々に珍重せらるゝ彼の「ダーリア」は花は艶であり開花期
 は長く培養も容易であるが然かし之れには芳香が添はないのである、開花期は
 長いにしてもとても四季を通じては開花はしないのである、且つまたその丈け
 高くして鉢植には不適當であると云ふ點に於て遙かに薔薇に劣つてをるから仕
 方がない一部の人々には或は愛翫さるゝかも知れぬが薔薇のやうに廣く深く一

般に珍重さるゝにはその資格が乏しいのである。
 かゝる理由に依り薔薇は實に萬花に優つておるものと云はねばならぬ、「蓼喰ふ
 虫も好き不好き」と云ふ諺さへもある世の中であるから千百種と夥多ある花
 でも何れもそれゝ或る人々の嗜好に投じて愛翫され得るには相違ないが薔薇
 のやうに萬人の嗜好に投じて愛翫的であると同時に冠婚葬祭の場合に實用的に用
 ひらるゝものは他に無いのである。
 盛花や花束や花環を造るには必ず薔薇を用ひなければ物足らぬ心地がするので
 ある、美女の頭を飾るには薔薇の花でなければ、面白くない、之れ等の點に於
 て他の草花は到底薔薇の敵でないのである。
 以上述べたやうな理由に由り薔薇なる觀念は歐米諸國を初めとして吾國の人々
 の腦裡に深く廣く浸み亘つて詩に讀まれ歌に唱えられて種々なる意識を表はす

八
 に用ひられたものであつた、極めて通俗的に用ひられて然かも高尚なる意を失はぬのが蕃薇の花の特色である、かゝる次第であるから蕃薇は將來益々世人の愛好の的たるに至る可き運命を有する花であつて、我邦に外國の珍奇なる新種の輸入せられてから日尙は淺きに拘はらず種々艷麗なる新種も出來て之れが培養は豫想外に盛大であるのは喜ぶ可き有様と云はねばならぬ、元來我邦とも從來蕃薇の種類がないでもないがそは何れも劣等種で一向見るに足らぬもので、現今名の知れたる種類はみな歐米からの輸入にかゝつたものである然るに我邦の風土は諸般の草花に適するやうに蕃薇にも極めて好適であつて従つて少しく之れが培養の道を究めれば珍らしき變咲を養成することは、左程の困難はないのである、現に蕃薇の熱心家にして珍奇なる變咲を養成した人が少なくない。

九
 歐米では比較的草花に不適なる風土を有する土地でさへも學理を實地に應用して、年々新奇な變咲を養成して他國へ輸出することを勉めてをる。我邦のやうなあらゆる草花に適する風土を有し、特に蕃薇の或る種は我邦でなければ到底培養することが出來ぬと云ふやうな有様である位置にあるものが、何時も何事にも歐米人に先鞭を付けられておると云ふことは誠に残念千萬なことではあるまいか。
 我邦のやうな氣候が温和であつて、萬般の草花に適する溫度と濕氣と土質とを有し、然かも巧みなる手を持つておる我國民たるものは、須らく能く理を究めて珍奇愛翫するに足る貴重なる變咲を養成して進んでは歐米に輸出すると云ふことは地の理を利用する上に於て、國富を計る上に於て國の名譽を高める上に於て、將に勉む可きことではあるまいか。

土地狭く人口多き我邦は米作の國には不適當である、桑園に廣き面積を要する養蠶の國には不適當である、少くとも近き將來に國を擧げて園藝の國となればならない、草花の國としなければならぬ、草花の種苗を外國に輸出するの國としなければならぬ、薔薇の變咲をば海外に輸出するの國としなければならぬ、薔薇の變咲を養成すると云ふことは必ずしも一個人の趣味の爲めのみではないのである、娛樂の爲めのみではないのである、小にしては一家のため、大にしては國家のためである。

總説の終りに望みて、家庭と薔薇との關係を少しく述べさせてもらいたい、「笑ふ門には福來る」と云ふ諺がある、成る程しかめ面をしておる人には福來ぬ、福は何時もニコニコと笑を含んでおる人のみを尋ねて來る、然らば一家が賑かで笑ひに満ちておる程良いことはない、床の間に挿されたる一輪の薔薇

庭前に鉢植にされ笑みを含んだる數輪の薔薇は、能く一家の笑の促がすものにはあるまいか、春の暖かき日は勿論の事、夏の晨、秋の夕、冬の木枯らしの吹くときでさへも、能く笑を含んで庭前に咲ける薔薇の花は、家庭の人々をして能く微笑を促がしむるにはあるまいか、少女が朱唇を固く結んで然かも微笑を禁じ得ぬが如き半開の薔薇の花は、能く家人の微笑を買ひ得るのである、心の邪しなる人でも笑みを含みたらんが如き赤き白き樺色の半開の薔薇の花に對してはその心を柔らげずには居られない、林檎色の頬をしたる愛らしき子供等が家庭の笑ひ聲の源であるやうに、薔薇の花は少くとも家人の笑みを催ふす可き元となり得るのである、牡丹、芍薬、百合の花をして美の神の使ひとしたならば薔薇の花は美と福の神の使ひに例ふ可きものである、福々して微笑を含めるその様は長へに家庭に平和を來たすものである。

此理由から云ふても薔薇は大に世に奨励す可き價值があると思ふ、單に興味のためではない、單に娛樂のためではない、また實に平和を來たすためである。

第二話 薔薇の生理

すべて草花を培養して良い花を咲かしたり香を高くしたり變咲を養成したりするには、先づその生育の理を知らなければならぬ、而してその生理は大體に於て多くの草花に於て一様であるけれども、それ／＼草花の種類に由つて特殊の作用を持つておる點があるから従つて生理上の作用も多少異ならざるを得ないのである、此生理上のことが委しく解つて之れを巧みに利用さへすれば、多くの草花は思ひのまゝに大きな花を咲いたり、華麗な色を現はさしたり將た又珍奇愛翫置く能はざるやうな變咲きの培養をもすることが出来るのである、

生育の理を究めずして草花を培養しやうと云ふのは、恰も木に依つて魚を求めると一般、到底その目的を達することが出来ぬのである。

従來我邦の多くの草花栽培家が、中々に驚く可き熱心と趣味を以て、薔薇の栽培に従事しても、とても西洋で産するやうな見事な花を得ることが出来ず、常に一步も二歩も彼に劣る所次のもは、彼の國の栽培家は能くその生理上のことを委しく知りて、巧みに之れを應用するに反して我邦の人々は一向に之れが智識に乏しく、恰も暗夜に燈火さへも付けずに、手さぐりで事を行ふと云ふやうなやり方をしておるからである、水を施すにしても肥料を施すにしても葉や蕾を剪るにしても鉢に植ゑるにしても繁殖するにしても變咲を養成するにしても、何れもみな生理上の作用から割り出したことではなければならぬ、實に生理が根本であつて従來草花培養者が之れを能く究めず、重きを置かなかつた

のは抑もの誤りである、此故に余は先づ生理上根本的に必要な事からの大要を茲に述べることにするから讀者は能く此點を了解して巧みに應用せらるゝことを心掛けねばならぬ。

(一) 葉の作用

葉は何れの植物でも高等でも下等のものでも草花類でも樹木類でも丁度吾々の胃に當る働をするもので極めて重要な作用を有するものである、人間の胃が大切である如くに植物に取つても極めて必要なものである、乃ち根から吸収された養分と葉自身が空中から吸収した炭酸瓦斯とが葉で合体して消化されて滋養液となつて体中を循環して全体を養ふことは恰かも吾々の日常食した食物が胃で消化されて血液となつて身体中を循環して全身を養ふのと同じ理であるのである、而して葉が養分を消化する作用をば特に同化作用と唱え

て此同化作用は日光と温度と水分などの關係に由つて盛んになつたり、又は微弱となつたりするのであるから此同化作用のことを説明するには勢ひ先づ此等の關係から説明せねばならぬ。

一、同化作用と日光

同化作用に最も密な關係のあるものは日光であつて、日光なくしては植物は生育しないのである、乃ち葉は日光の作用に依つて始めて根から吸ひ上げた養分やら葉自身が吸収した炭酸瓦斯の消化するのであるから、葉に取つては日光は一番大切のものといはなければならぬ、此故に葉は成る可く日光に當ることを勉めておるので、すべての植物の葉は能く見ると決して相互に重なり合つて日光を遮る様なことはしてゐない、寧ろ上から見ると恰も寄木細工のやうになつて何れの葉も日光に當ることを勉めておるやうになつておる、植物

の種類に由つて葉の形状は千差萬別であつても、その作用はみな一樣で何れも日光に當つて始めて同化作用を営み得るのである。

薔薇の葉は尋常一樣の扁平なる葉であるが松などのやうな針狀の葉とてもやはり日光に當らなければ同化作用は營まないものである、すべて草花の艶麗なる花の色澤もみな葉で同化作用の結果で現出するのであるから、花の美大豊艶なるを欲する場合とか或はその色澤の濃艶なるを欲する際には充分に日光に當てるやうにしなければならぬ、乃ちちかゝる際には特に日當り良き場所に植えるとか鉢植ならば日當り良き場所に置くとかなければならぬ、また香氣高き種類とてもその通りで強き日光に當てなければ香氣は高くならぬ、陰所に於いたり植えたりした薔薇は、たとひ芳香高き種類とてもその香が失せるのである。

之れを要するに葉が養分を消化して体を養ふのは、全く日光の力であつて従つて日光の不足する場合とか或は日光のない暗所にては植物は全く生育しないのである、特に草花のやうな艶麗なる花を造り出すのを目的とする場合には、之れを植ゆるには出來得る丈け南に面して、何等の障害物のない日當りの良き場所を撰ばなければならぬ、また種子を蒔いて實生を造る場合でも人工媒助法を行ふ場合でも接木をする場合でもその通りで、すべて日當り良き所を撰ぶの必要なのは一樣である、元來日光は太陽から來るものであつて、人力で増減することは絶對に出來ぬからして人力の盡す可き點は只日當りの良き場所を撰ぶにあるのである。

二、同化作用と溫度

日光の次ぎに同化作用に影響を及ぼすものは溫度である、然かしその適當の

温度は植物に依つて異なるので、開花温度でさへも花に由つて異なるのである。薔薇は他の花に比すると、比較的低温で開花するので、従つて種類に由つては四季を通じて開花し得るのである。

十八

一般に云ふと冬の寒き時分には、植物は全く同化作用を営まぬので従つて少しも成長をしないばかりか多くの植物の葉はみな落ちるのである、葉の落ちないものでも同化作用は停止しておるのである、然かし四季を通じて開花するものは、冬のやうな低温のときでも多少は同化作用をも営むのである。

要するに現時地球が太陽から受くる温度であるならば決して植物に過度と云ふことはないのである、温度に伴ふて水分さへ充分にあれば太陽から受くる温度が高いほどその生育がよいのである、熱帯地方で植物が如何に良く生育するかを見たならば此理が分るであらう、薔薇を始めとしてすべての草花は何れも

みなその花を開くのに適する温度が多少は異なるが一般に高温なる程良いのであるから、草花栽培業者は近頃盛んに温室の利用をなすのである、元來薔薇には一季咲、二季咲、四季咲のものがあるのであるが、一季咲のものでも二季咲のものでも温室を利用して常に適温を與へて、そしてその他の手當を施したならば絶えず花を開くのである。

要するに多くの草花の花を開くのは温度が適度であつて同化作用が行はるゝ場合に限るのであるから人工で以て温度を適度に爲せば思ひのまゝに花を開かすことが出来るので之れ等の點は大に草花培養家の研究す可きところである、乃ち同化作用と温度と開花とは相聯關しておるものである。

三、同化作用と水分。

すべて植物は日光を充分に受けてそして温度が適當であつても、水分が之れ

十九

に伴はないと充分に生育することは出来ない、従つて開花することも出来ないのである、元來植物の葉に由つて消化せられたる滋養分がその体内を運行して諸部を養ふには水分の力に待つのである、吾等の血液の大部分が水分から成り立つて居るやうに植物の滋養液もやはり大部分水分から成り立つて、そして体中を循環して諸部を養ひ開花の時期には花を養つて艶麗の度を増さしむるのである、いや花それ自身が水分に伴はれたる滋養分に依つて開くのである、薔薇のやうな花の豊艶なものでは之れが開くには滋養分を要することが多く従つて之れを運ぶ水分も多量を要するから之れを培養するに當つては水分をも充分に與えねばならぬ、特に春から夏にかけて盛んに開花生育するものにあつては水分の蒸發が盛んであるから従つて之れが供給も充分にしなければならぬのである。

要するに水分は日光と温度と相待つて同化作用を營む上に於て重要欠ぐ可からざるもので、之れなくしては植物が生育しない位のことには誰れでも知れるところではあるが然かし之れを施す都合に至つては中々六ヶ敷いのである、多分に施し過ぎては却つて害になるし、また少きに過ぎても艶麗なる花を開かすの害になるし、その適度を得ると云ふことが大に各草花の種類に應じて研究す可き問題であるのだ、薔薇にはどんな程度で施す可きやと云ふやうなことは後に述ぶることとして只茲には如何に水分が草花生育上必要なものであると云ふことを述べるに止めて置く。

以上は葉の同化作用について述べたものであるが葉はまた水分發散作用と云ふ重要な作用をも兼ね行ふのである、發散作用とは水分が常に葉面から發散する作用を云ふので眼にこそ見えないけれども、此作用は常に行はれておるので

ある、此作用は水分の体内運行作用と相聯關しておるもので實を云ふと植物の根が養分を吸収するのは全く此發散作用に依ると云ふても良い位である、乃ち葉からは絶えず水分が發散すると其欠を補ふために自然と器械的に根から水分を吸ひ上げるやうになる、その際に水分中に溶解しておる養分が共に吸収せらるゝと云ふ工合になつておるのである。

此故に發散作用は極めて重要な作用の一で炎熱の強き時などには極めて盛んであるから従つて水分の不足しないやうに充分に供給せねばならぬのである、温度が高いと同化作用も盛んであるし發散作用も盛んであるから水分を根から吸収せらるゝ分量が多くなる、従つて之れを供給するには能く過不及ないやうにするのが草花培養上大に勉む可き點と云はねばならぬ。

(二) 莖の作用

莖は植物体をしつかりと地上に支へ従つて枝や葉や花を支へて成る可く空中に擴げて植物体を良く日光に觸れさすやうにするのと養液の運行の通路とをなす作用を有するのである、されば植物の性状に由り葉や枝の大小形状或は草花で云えば花の大小形状に由つて莖は必ずしも長大である必要がないから短きものも長きものも太きものも細きものも柔かきものも硬きものも色々なる之れみなその植物の性に由るもので他からは非善惡を評するわけにはいかぬ。

蕃薇はその性半灌木と稱す可きもので主として木質を有して莖小なれども堅硬である、元來蕃薇はその葉は大と云ふのではなけれども、その花は内部が充實して瓣の數が多く従つて比較的重いからかゝる堅硬なる莖でなければ之れを支えることが困難であるがために自然莖がかゝる性状を有しておるものと見える、また種類に由つては蔓性で架に倚つて伸長するものもあるけれども、何れ

も心は木質でその丈は丈餘に達するものもある。

要するに莖は植物体全体から云ふと葉や根ほどに重要な働きをなすものでなくして従つてその形に大小、長短硬軟があつて極めて變化に富み植物に由つては莖の欠けておるか或は極めて短小なるものがあるのである。

(三) 根の作用

根は人々の知らるゝやうに主として養分を吸収する器官で葉が胃であるならば根は口に當るのである、然かし根の作用は之れに止まらないで植物体の倒れないやうに地上に支える作用をも兼ねておる、元來根の吸収する養分は必ず水分と共に吸収するので従つて養分は溶解性のものであつて水分に溶解してなければ植物の養分とはならないのである、肥料の種類は多くあつて直ちに水に溶解する性状のものもあるけれども、そうでないものも多い、かゝるものは先

づ分解して水溶液になるか或は化學變化に由つて一度は水に溶解するもの、變化しない限りは植物の養分にはならないのである。

要するに根は無意識に水分を吸収すればその水中に溶解しておる養分が無意識に吸収せられて養ひになるのである、かやうに根は水分を吸収するものであるから水分を根に多量に施しても差支へがないやうであるが決してそうでないこの點が大に心得ねばならぬのである、普通の陸上の草花でも他の植物でも水分をあまり多く施し過ぎると之れがために根が害を受けて植物は枯死するのである、今その理を少しく説明せねばならぬ。

根は植物に取つてはその働きの最も活潑な部分であつて、すべて生きたものは何れもみな呼吸作用を営むものであるから根もやはり此呼吸作用を営むのである、呼吸作用とは空気を吸収して炭酸瓦斯を吐き出すこと尙ほ吾々の呼吸す

るのと同じことであるから、根は地中にありながら常に空気を要するのである、元來土中には普通の状態に於ては空気の流通しておるもので彼の土地を耕耘するのは土壌を膨軟にして空気の流通を計る方法に外ならぬのであるが、今あまり多く水分を施し過ぎると水分のために土中に空気の流通を妨げ従つて根の呼吸作用を害するから終に根に大害を與えるのである。

此故にすべての草花を培養するに當つてもあまり水分を多く施し過ぎてはならぬ、さりとて少なきに過ぎるのも元より良くないので、その分量は草花の種類と氣候 關係に由つて大に異にせねばならぬのである。

尙ほ述べ可きことは根は植物体中感覺の極めて鋭敏な部分であつて、従つて温度に感ずることも多く土地の温度が適當に高ければ高いほどその働が盛んであるから植物を培養してその生育を盛んならしむるには、従つて土地の温度の

ことも注意をしなければならぬ、乃ち多くの場合に於ては土地の温度を高める工夫をすることが肝要で之れには後に述ぶる燻炭を用ゆることが最も必要であるのだ、此燻炭は地温を高むるの外根から分泌する根自身に有害なる有機酸を分解して無害にするの作用があるので之れを用ゆると種々の點に於て根の作用を増進することが多いのである。

要するに根は植物の最も重要な部分であつて、どんな美麗な花でも根から來るのであるから大に之れを大切に保護しなければならぬのは言ふまでもないことである。

(四) 花の作用

花は言ふまでもなく生殖の器官であつて自己の種屬を永遠に傳えんが爲めのものである、従つて植物自身から云へば何も左程に美しくなくてもよい、此故

に植物に由つてはその花は極めて微小で色もなく香もなく一向見るに足らぬどころか人の注意をさへ引かぬ位のものがある、稻の花とか麥の花とか云ふやうなものも普通の人々には一向見分けの付かぬ位つまらぬもので、いつ開いたかいつ萎んだが分らぬ位のものである、然かし艶麗なる薔薇の花とその目的は一つである、目的が一つである以上はその生理には變りがない、生理に變りがない以上はその働きは同じであるかと云ふと必ずしもそうでない、と云ふのは多くの花は實を結び種子を残すけれども櫻の花とか山吹の花とか薔薇の花と云ふやうにその種類に由つては實を結ばないものも随分ある、これはどう云ふわけかと云ふと元々は何れも實を結んだものであるが、多くは人工の結果乃ち培養の結果變じて斯様になつたものである、また櫻の花でも薔薇の花でも其他多くの八重の花でも元をたゞすと何れも單瓣の花であつたのが人工培養の結果か

やうに變化したものである、單瓣の吉野櫻と艶麗な八重櫻とはとても比較にならないほどその美しさが違ふではないか、花には薔薇でも菊でも「ダーリア」でもその種類が何百種と云ふ程あつて各々異なつた色や形を備えておるが何れもみな一種類から變化して來たものである、して見ると花は培養の工合で如何やうにも變化するものであると云ふことが分るではないか。

薔薇の變咲を養成するのも全く花の此性状を利用したもので培養の仕方によつては吾等の思ふがまゝに變化することが出来るのである、元來花にはその完全なものにはその中心に雌蕊があつてその周圍に雄蕊がありそのまた外圍に瓣があつて此雌蕊と雄蕊とが合体して始めて實を結ぶ位のこととは大抵の人は知つておるところであつて、我々の見て艶麗として楽しむところは主として瓣であるのである、實を云ふと花の本体は雌蕊と雄蕊とであつて瓣は植物自身に取つ

てはあまり必要のないものであると云ふことが出来る、従來の説では薔は花が虫類を呼び寄せて花粉の交接の媒助をなす働きをするものであると云ふことがあるが、之れは間違つておる説と云はねばならぬ、なせかと云ふと昆虫の眼は決して紅紫紅白や形などを見分ける力はないもので昆虫の來るのは各花固有の香氣を傳ふて來るのである。

要するに植物は何れの部分でも人工に由つて變化する性質を備えておるもので特に花はその影響を蒙むることが大きいから従つてかゝる美大艶麗なるものを造り出すことが出来たのであると云ふことが出来る、此理から推して考へて見ると現今の花はその培養の工合に由つて數等、數十等立派なものに仕立てることが出来ると斷言し得ることになる、薔薇の花でも目下徑三寸のものが四寸にも五寸にも六寸にも成ることが出来るのである、現に歐米各國では絶えず

かゝる優等種の發生を目的として研究しつゝある結果毎年進歩した種類が多くなるのである。

昔時極めて粗末なる野薔薇が化して現今あるやうな艶麗なる花となるのは多
大の年數を経過して始めて出来たものであるが今後一層立派なる變咲を造るに
はやはり多くの年數を要するかと云ふに決してそうではない、昔時はその培養
の術は進歩せず人々の草花を愛する度も極めて低く、つまり人工を加へること
が少なくなつたか或は全くなかつたと云ふてもよい位であつたから、かく多年を
要したものである、であるが現今のやうに草花を愛好するの度が非常に高まり
従つて之れに關する學理乃ち人工媒助法や、接木術や、培養の方法などすべ
て花を改良進歩さす方法が進んで來ておる時代には、之れ等の方法を巧みに應
用しさえすれば左程に年數を要せぬのである、いや年々珍奇な變咲を得ること

とさ容易である、之れ薔薇栽培家などの大いに注目すべき點ではあるまいか。

以上述べ来たところに由つて植物の重要な部分である葉と莖と根と花の作用とその性状の主要は終つたのであるが、さて之れ等の諸器官は言ふまでもなく何れも共同的に作用をしておるもので相待つて植物の健康を維持しておるのである、ところで茲に讀者の注意を引きたいのは薔薇を始め其他の草花を培養するのは必ずしもその植物の健康のみを維持するが目的でないので美大艶麗にして珍奇なる花を咲かすのが目的であると云ふことである、たとひその植物体は多少虚弱であつても枯死しない限りは花さへ立派であれば良いのであるから、他の部を犠牲に供したりとて植物が枯死しない限りは種々なる方法手段を取らなければならぬのである、もし薔薇の強健なるものを求むるならば野生

の薔薇に及ぶものはない、然かし觀賞品として野薔薇は價値のないものではないか、然からば美大艶麗なる花を得るが爲めには葉を剪る場合も枝を剪る場合も時としては根の一部を断つ場合もあるのである、或は水分や養分を生理に反して加減することもある、之れ等の手加減を如何に施す可きやを述べるのが本書の主意である。

然かしあまり生理に反したことを行へばその植物は枯死するのであるから要は生理上のことを能く心得て生理を害してその植物を枯死することのないやうな範圍に於て仕事を行はねばならぬ、乃ち臨機應變の手加減をするのが妙術を施す可き範圍であるのだ。

第三話 蓄薇の種類

蓄薇の種類は現今極めて多く一々之れを數え擧げたならば數百種を越えて尙ほ年々その數が増しつゝある有様である、之れ一面蓄薇愛好家に取つては誠に喜ぶ可きことで今後益々その數は増す一方であろう、ところで茲に讀者の注意を促したいのは種類名の甚だ亂雑なことであつて甲の花戸で玉塵と云ふものを乙の花戸では風車と云ひ丙の花戸では白七子と云ふが如くに同一物に數種の名があつてその名が一定して居ないと云ふことである、之れ極めて初めて栽培する人々に取つては不都合のことであるが、どうも致し方がない、斯く名稱の亂雑に流るゝのは單に蓄薇ばかりでなく菊でも牡丹でも花菖蒲でも多々人々に培養せられて愛玩せらるゝものほどその弊が多ひのである、こは主として花戸

が往々爲めにするところがあつて故意に猥りに新名を附するに由ることもあるが一方から考へると蓄薇が廣く人々に珍重せらるゝ結果とも見做さるゝので蓄薇栽培家が珍奇な變り咲きを得んとて従來の種類に工夫を加えて、そして多少の變つたものを得た場合には直ちに新名を加えると云ふやうな有様であるから従つて多少重複する場合のあるのは免かれぬことである。
然かし少しく蓄薇栽培に従事しておると、その品種を識別することは極めて容易の業で例へば西王母に寶鼎、櫻鏡に旭の瀧、楊貴妃に驪山の月等其他數種の例外を除くの外は幾百種の蓄薇に其葉や其莖や其刺などを比較すると必ず同型のものはないのであるから、之れにて容易に區別することが出来るのである、また少しく熟練すると大抵は一枚の葉を見てその形状や色澤や組織等に由つて判別の附くやうになるものであるから、兎に角栽培して種類の判別

を自得するに限るのである。

余が本書を述ぶる主旨は従来有る種類を基として珍奇なる變咲を養成するのであつて従つて従來の種類をも明らかにせねばならぬ、然かしその名稱が誠に前に述べたやうに重複して、そして複雑であるから今最も各栽培家や花戸を通じて用ひらるゝ所の品名中で特に優等のものを撰んで擧げることにする、尙ほ最新優等種を先きに掲げやう。

恩賜 四季咲で稍丸形で咲出が雪白中心「オレンジ」色で厚瓣盛形咲で千重の大々輪で氣品殊に高く芳香も高く極めて優等種である。

大鵬 四季咲で光澤ある鮮桃色で瓣の形も廣大で三、四重咲の最大輪で丁度牡丹のやうである、芳香も高い。

將軍 四季咲濃樺色稍白覆輪の平形で健瓣八重房咲大々輪である。

金碧 四季咲で朱銅色異彩がある、大輪で一二重乃至三四重咲の珍種である。

鳴海 四季咲で表肉色裏濃紅樺色厚瓣八重盛形咲で大々輪である。

秋津 四季咲で淡黄樺色を含み紫覆輪を掛け最も芳香に富み長形で千重咲の大々輪である。

両面 四季咲表白初瓣紅の刷目裏紅抱受咲最大輪である。

錦鯉 四季咲で紅色佳麗瓣狂ひ平形受咲八重の大々輪である。

豊歳 薄きとき肉色抱形千重最も大輪で芳香高き優等種である。

洛陽 四季咲高尚なる淡紅色長廣形立瓣咲五六重最大輪で芳香が高い。

伽陵 四季咲、鮮麗なる唐紅、平立瓣、四五重大輪で絶えず花蕾を出しておる。

泰平 四季咲純 桃色廣 瓣五六重 剣瓣車咲大輪である。

筑波 四季咲青白色 外瓣に稍紅掛があり千重受咲大輪である。

友鶴 四季咲で濃き桃紅千重菊咲で輪大ならざるも最も愛翫す可き種類である。

天國香 淡紅色八重の大輪で芳香極めて高く四季咲で蓄微中最も優等の評がある。

陽臺の夢 花最も大で千重で紅色で牡丹と誤らるゝことさえある、その最も大なるものでは徑八寸に達するものさえありて白色のものは價が高い。

醉美人 四季咲白地に淡紅色を潮した重瓣の小輪で可憐の蓄微である。

金光殿 四季咲淡黄重瓣の大輪、満開後淡紅に變する性がある。その花色も大さも賞翫に價するも満開後瓣の脱落し易き傾がある。

三光錦 淡紅地に濃紅の絞りある八重の中輪で四季咲である。

西王母 四季咲で淡樺色重瓣の大輪で賞翫す可きものである。

銀世界 四季咲で白地に淡黄を含み千重の中輪で高尚なる氣品を備えておるが培養や、困難である。

立田川 中季咲で濃紅重瓣の中輪であつて一部の人々に賞せらる。

楊貴妃 四季咲で淡紅八重の大輪、香氣が極めて佳良である。

華寶殿 四季咲濃黄色の極大輪で一流の良種である、只少しく欠點とするところはその瓣層が極めて厚く外瓣から徐々に解舒する性があつて瓣と瓣とが相粘着し中から蒸れ爛れて腐敗する性があることである。

七子遊 淡紅一瓣の最小輪で丈低く四季咲である。

貴公子 淡紅單瓣の大輪でその寧ろ濃艶に過ぎないのが趣きがある。

酒中花

白地紅覆輪千重の中輪で四季咲である。

泰山白

純白大輪で極めて芳香に富み花瓣の肉厚く千重豊満の品種で四季咲で色種中の優品である。

王照君

四季咲大輪で白色に少しく淡紅を帯びた逸品である。

太平樂

花形頗る大輪で賞す可き種であるけれども花梗が弱くて少し垂る

扶桑紅

淡紅色に少しく濃紅の筋を交へたる大輪で四季咲である。

泰山香

四季咲種で白地に微紅を含む極大輪千重咲で花瓣に光澤があり芳香も高く逸品である。

連城壁

四季咲白千重抱咲で所謂球咲と稱するものである。

泥中玉

四季咲、淡黄重瓣の大輪で一つの良種たるを失はない。

氣味がある。

淡紅色に少しく濃紅の筋を交へたる大輪で四季咲である。

四季咲種で白地に微紅を含む極大輪千重咲で花瓣に光澤があり芳香も高く逸品である。

四季咲、淡黄重瓣の大輪で一つの良種たるを失はない。

四季咲、淡黄重瓣の大輪で一つの良種たるを失はない。

四季咲、淡黄重瓣の大輪で一つの良種たるを失はない。

四季咲、淡黄重瓣の大輪で一つの良種たるを失はない。

四季咲、淡黄重瓣の大輪で一つの良種たるを失はない。

四季咲、淡黄重瓣の大輪で一つの良種たるを失はない。

四季咲、淡黄重瓣の大輪で一つの良種たるを失はない。

四季咲、淡黄重瓣の大輪で一つの良種たるを失はない。

四季咲、淡黄重瓣の大輪で一つの良種たるを失はない。

四季咲、淡黄重瓣の大輪で一つの良種たるを失はない。

四季咲、淡黄重瓣の大輪で一つの良種たるを失はない。

四季咲、淡黄重瓣の大輪で一つの良種たるを失はない。

四季咲、淡黄重瓣の大輪で一つの良種たるを失はない。

四季咲、淡黄重瓣の大輪で一つの良種たるを失はない。

四季咲、淡黄重瓣の大輪で一つの良種たるを失はない。

四季咲、淡黄重瓣の大輪で一つの良種たるを失はない。

四季咲、淡黄重瓣の大輪で一つの良種たるを失はない。

四季咲、淡黄重瓣の大輪で一つの良種たるを失はない。

四季咲、淡黄重瓣の大輪で一つの良種たるを失はない。

四季咲、淡黄重瓣の大輪で一つの良種たるを失はない。

四季咲、淡黄重瓣の大輪で一つの良種たるを失はない。

四季咲、淡黄重瓣の大輪で一つの良種たるを失はない。

四季咲、淡黄重瓣の大輪で一つの良種たるを失はない。

初日影

白地に淡紅を帯びた重瓣の小輪で中々に可憐な四季咲である。

星月夜

白地に紅點を有する千重大輪の四季咲である。

如葉花

此種の特點と云ふのはその花瓣が綠色で千重四季咲の小輪で奇

觀である。

仙翁

純樺色平形八重四季咲で最大輪の逸品である。

金盃

黃金色八重咲で芳香高く大輪で美々しき逸品である。

親玉

眞白抱玉形受咲で芳香高く大々輪である。

明星

金樺色で黄色紅掛八重最大々輪で美麗なる種類である。

不二

白色立健瓣咲で八重の大々輪でその姿立派である。

鹿島

樺茶黄色で後白色抱八重の最大輪で四季咲である。

常夏

鮮桃丸形抱咲千重最大輪で四季咲である。

金太陽 樺黄千重で芳香高く盛咲の大々輪である。

羽衣 とき色地に紅黄色を帯び四五重平咲の大々輪である。

満月 純白千重四季咲性で大輪で秋季特に美事に開花する。

滄明 肉色で中央黄樺盛咲千重大々輪で四季咲である。

黄金 黄色を帯びたる樺色千重の大輪で頗る佳品で四季咲である。

湖上月 雪白で中心が黄色 受咲で千重の最大輪である。

櫻鏡 櫻色で八重の大輪四季咲である。

東天光 樺色地に薄紅を帯び重瓣の中輪種で四季咲である。

驪山月 純白八重の大輪で風姿極めて高尚で四季咲の逸品である。

白帝城 純白重瓣の大輪四季咲で中々の逸品である。

和合神 白色重瓣の大輪で良品である。

鳳凰錦 淡紅重瓣四季咲で中輪である。

蝦夷錦 白地に淡紅を帯びた中輪で良品で四季咲である。

松風 薄樺の黄色で平咲で芳香高く大輪である。

錦紅 表は鮮紅裏白平瓣千重咲大々輪である。

御旗 千重受咲濃紅で光澤があり香高く四季咲大々輪である。

慶賀 千重咲底樺黄色でとき色を帯び芳香強く四季咲の大々輪である。

鶴壁 雪白千重抱咲芳香極めて高く大々輪である。

三公 紅掛底黄を帯び千重長瓣で最大々輪である。

老楽 濃桃色千重受咲大々輪である。

吹雪 白底薄黄千重咲大々輪である。

紅司 純赤色 廣瓣八重大々輪である。

緋飾 金鳳 萬代 神風 九尾 神樂 丁字車 金鸚鵡 爵金光 世界圖 美香登

濃淡紅色八重平咲大輪である。

八重純黃芳香ある大々輪である。

千重淡色底黃紅覆輪香大々輪である。

雪白八重抱咲廣瓣大々輪である。

金樺千重で香氣強く四季咲大々輪である。

淡肉色千重受咲で四季大々輪である。

四季咲重瓣の大輪で變化し易き種で逸品である。

淡黃重瓣の中輪で四季咲である。

樺色重瓣の大輪で四季咲である。

白色にとき色を交えたる四季咲の大輪種である。

樺色重瓣の大輪で四季咲で樺色種中の優等品である。

白樂天 月の光 月の都 旭の雪 虹の跡 日の出 峯の雪 金鳳

のものである。

白地に淡黃を帯びた中輪で四季咲で逸品である。

淡黃色重瓣で大輪で四季咲である。

白地で淡紅を帯び四季咲重瓣の大輪である。

淡紅單瓣の大輪で四季咲で高尚なる良種である。

淡黃地に淡紅を帯びた重瓣の大輪で四季咲である。

濃紅色重瓣中輪の四季咲蒸微である。

雪白八重で中輪の四季咲で高尚なる良種である。

純黃色八重四季咲性の大き輪で芳香に富み黄色薔薇の中で第一流

白黃 純白地に淡黃を含んだ重瓣の大輪四季咲性で芳香高くその花容の高

尚なることなほは實に第一流の價值がある。

宇宙 白地に淡黄紅色を含んだ大輪で四季咲である。
 寶鼎 濃黄色重瓣の大輪四季咲で優等品である。
 日光 極緋で千重で芳香高く四季の大輪である。
 大紅 淡紅に濃紅大紋りで香高く八重四季咲である。
 聖代 鮮桃色八重玉咲で四季咲の最大輪である。
 新天地 桃色白絞千重で香高く四季咲の大輪である。
 金司香 純黄八重で香氣強く四季咲の逸品である。
 新世界 純白八重で四季咲の大輪である。
 明石 本濃紅千重で四季咲の大々輪である。
 高砂 表白く裏淡色千重の大々輪で佳香がある。
 白天國香 白八重で四季咲大々輪で香氣が峻烈である。

蜀紅 緋紅千重の大々輪で最も香氣が強い。
 黒船 黒紫紅千重大輪で香氣が高い。
 磨墨 濃紅で殆んど黒色で香氣があり八重の四季咲大輪である。
 東雲 薄鶉色紅掛千重大輪である。
 慶典 深紅長瓣八重大輪四季咲で香氣がある。
 香爐峰 薄茶で黄色を帯び満開後白色に變ずる八重の大輪で四季咲である。
 醉鶴 白地に淡紅を帯びた重瓣大輪の四季咲である。
 敷島 鶯黄色で重瓣大輪の四季咲種で佳香に富める良種である。
 紀念 純紅色で單瓣で大輪の四季咲種である。
 麗色 白地に淡紅を帯び中輪で四季咲である。

鶏冠

淡紅色重瓣の大輪で開花後鮮紅色となり中々美麗で四季咲種である。

大港

淡紅色重瓣大輪の四季咲である。

花車

紅色八重大輪の四季咲種で狂咲を生ずることが多い。

慶典

濃紅花八重の大輪で四季咲である。

雪見半

純白重瓣の大輪四季咲である。

羅綾袖

紅色千重の大輪四季咲で花心に朱黄色を含んでおる。

隨一白

白花八重の大輪で四季咲である。

以上述べ來つた種類は主として木性薔薇と稱す可きもので枝幹灌木の姿勢をなして梢頭必ず花を附くるもので何れも四季咲が常であつて最も優等の種類に屬するものである、右の外叢性類と稱えられて株根から數幹を叢生する特性のあるものがある之れには一季咲があるし二季咲があるし四季咲がある、概して

花形は大であれども姿勢風致に乏しい。

また蔓性薔薇と稱えて架に倚つて延長してその丈一丈餘に達するものがある之の種は花の「トンネル」を造つたり或は洋館の壁上に攀らせる種類で巧みに之れを用ゆると種々思ひのまゝの形にすることが出来るのである今之等の種類の主なるものを次に述べやう。

先づ叢性薔薇の種類を擧げると、

狂獅子

淡紅色千重の大輪で二季咲である。

黒海

濃紅で重瓣の大輪で二季咲である。

新天地

薄紅大輪の四季咲で花心に白絞を交えて珍奇な種類である。

天地開

薄紅の大輪四季咲で花容は豊艶で芳香峻烈である。

花大臣

濃紅色重瓣の大輪で四季咲である。

君が代

濃紅單瓣の小輪で四季咲である。

長樂

淡紅地に淡紫を含める千重大輪で四季咲である。

今玉藻

淡紅重瓣の大輪で四季咲である。

緋の袴

緋の鮮紅色で八重大輪の四季咲である。

猩々舞

濃紅重瓣の大輪種四季咲である。

錦衣紅

濃紅重瓣の大輪種で四季咲である前者よりは形が一層大きい。

鞠の曲

白地に紅霞を帯びたる重瓣で中輪の四季咲である。

虎の洞

濃紅重瓣の大輪で猩々舞より幾らか小である。

白星光

純白大輪の四季咲種である。

桃園

淡紅色四季咲の大輪である。

綾錦

紅地に白絞ある大輪の四季咲である。

一條紅

濃紅重瓣の大輪で芳香に富める二季咲種である。

大統領

淡紅重瓣の最大輪で一季咲の品種である。

瑞星

淡紅重瓣の小輪で一季咲種である。

天鷲絨

黒紅色千重で花瓣に光澤があり、一季咲の中輪である。

黒牡丹

黒紅色で重瓣の大輪で一季咲種である。

緋の司

淡紅千重の中輪で一季咲種である。

清香

淡紅色で千重の大輪で二季咲である。

福包

淡紅色千重の中輪で二季咲である。

東錦

淡紅地に淡紫色の絞があり重瓣で中輪の一季咲である。

夜光

濃紅千重の大輪で一季咲である。

鮮紅

濃紅千重の大輪で一季咲である。

風車 黒紅色千重の大輪で一季咲である。

蔓性薔薇の主なる種類は、

千里香 淡樺色で重瓣の大輪で四季咲性である。

大山吹 濃黄色 千重四季咲の大輪である。

雪山香 淡黄色 重瓣の小輪で四季咲である。

金生城 淡黄色で重瓣大輪の四季咲である。

金冠 黄色の重瓣で四季咲の大輪で頗る美花である。

瑞寶 濃樺色八重の大輪で四季咲性である。

黄の司 濃黄で千重の中輪で四季咲である。

白雲 白花重瓣の小輪で四季咲である。

随一紅 濃紅色重瓣の中輪で一季咲である。

淡雪 白花單瓣の小輪で一季咲である。

地球の玉 淡黄重瓣の中輪で四季咲である。

金孔雀 樺色重瓣の中輪で一季咲である。

朝霞 淡紅色千重の大輪で一季咲である。

萬里香 淡樺色重瓣の大輪四季咲である。

乙女袖 淡紅重瓣の中輪四季咲である。

以上は木性叢生蔓性薔薇の主なる種類を述べたのであるが、尙ほ右の外此各性に屬するも多少その性状を異にしたもので注目す可き種類を紹介することにする。

玉塵 四季咲の侏儒薔薇で姿勢盆栽に適しており花白く小さく普通の薔薇

とはその趣きを異にして之の盆栽が満開したときは一異観である。

巧笑こうしょう 四季咲の侏儒薔薇で鮮紅色單瓣で小輪である。
 都の錦みやこのにしき 純白地に濃紅の絞りのある單瓣小輪の四季咲である。
 如蓮にょれん 白色重瓣の小輪で四季咲である。
 慶雲けいうん 白地に淡紅を帯びた重瓣の小輪で四季咲である。
 紅梅こうばい 薄紅色の單瓣小輪で四季咲性である。
 岩鏡いはかみ 淡紅單瓣の小輪四季咲である。
 好交友こうかうのとも 白地に淡紅霞を帯びたる單瓣の中輪で一季咲である。
 雪花せつか 雪白單瓣の中輪で一季咲である。
 佛見笑ぶつけんせう 淡紅千重の中輪で二季咲性の薔薇である。
 喜見花きけんか 淡紅單瓣の中輪で一季咲である。
 十二一重じふにひとか 白地に淡樺黄を帯びた千重の中輪で四季咲である。

月の桂つぎ 青白色千重の中輪一季咲である。
 月宮殿げつきうてん 雪白千重の中輪四季咲である。
 香世界かうせかい 雪白千重の最小輪一季咲で香が極めて高く麝香薔薇の稱がある位である。
 龜玉きまぐ 濃黄千重の最小輪一季咲で盆栽に仕立てるによい。
 青山雪せいざんゆき 雪白單瓣の中輪一季咲種で盆栽用の種である。
 篝火かきりび 淡紅單瓣の大輪一季咲種で花容面白きものである。
 女化紅にょくわこう 淡紅單瓣の小輪一季咲で盆栽種である。
 蜀紅錦しよくこうにしき 紅色重瓣の小輪で一季咲である。
 加茂の雪かものゆき 白色單瓣最小輪の一季咲である。
 高根の雪たかねのゆき 雪白單瓣小輪の一季咲である。

陸奥の雪

雪白單瓣最小輪の一季咲である。

銀波

白地に淡紅を帯びた單瓣小輪の一季咲である。

雪柳

白地に淡紅を帯びた最小輪で一季咲にしてその特色は葉形が繊細な

る點である。

無忍者

白單瓣の最小輪一季咲でその特色は枝幹に刺を生せない點である。

墨水紅

淡紅單瓣の最小輪一季咲である。

瑞雲紅

濃紅單瓣の小輪で一季咲である。

漢宮春

白地に單紅を帯びた單瓣小輪の一季咲である。

春霞

淡紅千重の最小輪一季咲である。

春駒

白色で紅覆輪があり一季咲單瓣の小輪である。

殘星

雪白單瓣の最小輪一季咲である。

如霜

白單瓣の最小輪一季咲である。

金世界

濃黃重瓣の小輪で一季咲である。

宇治里

淡紅の重瓣の中輪で一季咲である。

谷の雪

白色千重の小輪で一季咲である。

大和錦

白地に濃紅の絞がある一季咲である。

蘭香待

雪白重瓣の中輪で一季咲である。

十丈紅

淡紅千重の中輪で三季咲である。

色自慢

淡紅單瓣の中輪で二季咲である。

香雪

雪白單瓣の中輪二季咲である。

紅牡丹

淡紅單瓣の大輪三季咲である。

三國紅

淡紅單瓣の小輪一季咲で盆栽に適する種である。

以上述べ来た種類は現今多少世に知られたる主なる種類であつて將來は之れ等の種類を基礎として余が段々本書に述べる方法を利用して益々優等の變映を養成せねばならない、而してその名命法としては別に法あるにあらす各人勝手に名稱を附するのであるが成るべくその特色を現はすやうな名稱を附けるにこしたことはない、だんく優等な種類が増せば從來の劣等の種類は世に忘れられるやうになるので、現にその新沈退謝がはげしいのである、從來は未だ世間では多く新種とか變映とかの意味を充分に了解しておる人が少ないやうであつて、自分で實生や其他の繁殖法に由つて培養して少しく從來のものゝ變つたものが出來るとすぐに勝手な名を附けると云ふやうな風習があつて従つてその名稱の數も幾千百種と云ふやうな有様である、之れ等は誠に不都合のことであるを迷はすことが多い。

元來新種とか變映とか云ふのはその性状が固定して容易に變化しないものを云ふのであるのに、その性状の一向に固定しないものをもみな勝手な名を附けて居るのが多くの場合に見出さるゝ、かくては甚だ亂雜に流れて眞正の新種の養成する勢を害するのであるから、之れ等は大に慎しまねばならぬことである。

第四話 薔薇と土質

土地は植物に取つては丁度吾々の家に當るやうなもので植物の本体は元より根ばかりではないが、根が主要の部分であるとしたならば、その根を容れる可き且つは養ふ可き場所である土地は極めて重要な關係を有するのであると云ふことは明らかである。

されば何れの植物でも之れを培養してその生育を全ふせしめ進んでは之れが

性狀を改良し、草花ならば美大艶麗なる花を咲かし、その變咲を養成して之れが改良進歩を計るには先づ土地乃ち土質のことに重きを置かねばならぬのは自然の理である、植物は動物とは遠がい土地の中に根を容れなければ生育することが出来ない、然かも一定の場合に固定したならばその土地が不適當であると云ふて容易に動物のやうに他に移動することが出来ないものであるし、よし移植され得るにしたところで、その移植の際には必ず多少根を害することを免れないから、必ず始めからその適する土質を撰んで之れに植え付ける方法を採らなければならぬ。

ところで植物は各々その性狀が異なつて居つて従つてその各々の撰ぶ土質の異なるのは理の當然であるが同じ薔薇の種類にしても幾千百種とあるのであるから、各々その撰ぶ土質の異なるのは自から免かれ難いことである。

然かし茲に多くの薔薇の種類につひて、一々その適する土質を擧げることには出来ないものであるから要は只一般の薔薇に適する然かも變咲を養成する場合に如何なる土質が良きやと云ふことの大要を説明することにする、從來多くの人は草花を培養するのに池溝中の泥土などを肥土と稱して好適なものとして用ひ來つたものであるが、之れ等は必ずしも良くない、土質を撰ぶのに肥料の關係に重きを置く必要はない、肥料は別に施せばよい、土地は植物の根に養料を給する場所には違ひないが單にそのみの用をなすのでないから、其積りに考へなければならぬ、肥料の供給所であると同時に根の住宅のやうなものであるから、根をして成る可く健全に衛生的に人間ならば氣持を良からしむるやうにする土質が最も植物に取つて必要なのである。

薔薇は元來四季を通じて開花するもので従つてその性は概して強健で土質の

嗜好も多くの草花のやうに六ヶ敷くはないが概して多くの植物のやうにあまり乾燥した場所は好まぬ性があるから特に夏季に栽植する場所などには陰湿と云ふ程度でなくとも多少何時も湿氣を含んでおると云ふやうな土質と場所とを要するのである。

元來前にも述べたやうに植物の根はその本性として呼吸作用を営むばかりでなく根自身から自身に有害なる有機酸を分泌するものであるが、之れを無害にし且つは呼吸作用を完全に營むには土中に空氣の流通を要するのである、特に草花の中でも薔薇のやうな半灌木であつてその性の強健なものにあつては呼吸作用を營むの度が極めて盛んであるから一層土中に空氣の流通を要するのである、此故に土地は成る可く膨軟であつて砂土を混じ適宜に濕氣を保ち得るやうなものでなければならぬ、また適宜に濕氣を含むと同時に適宜に排水をも行ひ

空氣の流通の良きものでなければならぬ。

かゝる理想的の土質は或は天然の状態では存せないかも知れぬから人工的にかゝる土質を配合して造り出すのが草花培養家の正に勉む可きところである、之れが農作物とかその他の植物を大きな面積の地所で培養すると云ふ場合には手敷と費用がかゝつて人工的に土質を仕立てることは或は出来難いことかも知れぬが、草花栽培などのやうな集約的、然かも多くの場合に費用を惜まぬものにあつては他から土を取り寄せて理想的の土壌を造ることは必ずしも困難でない、いや出来難いことではない、此故に余の薔薇、特に珍奇な變咲を培養する上に於て最も好適の土壌と認めて配合土の割合を示すと

壤土四分 細砂二分 腐朽土二分 燧炭二分

右のものを右の分量に能く混合したものが最も理想的の土壌である。

壤土と云ふのは東京附近の普通の畑土のやうなものを稱するので之れを乾かすと容易に粉碎されてふわ／＼とするやうな土質を云ふので細砂とは成る可くは河岸に集まれる極めて細かなものを良しとする。

また腐朽土と稱するのは堆肥を永く堆積して自然に腐朽したもの粉末にしたもので此堆積肥の原料としては主として藁や落葉や其他圃場の塵芥など何れも有機物でありさへすれば、何んでも集めて積み重ねて自然のまゝに腐朽させたものを云ふので此ものはその性膨軟で適宜に濕氣を吸収保存して蓄養培養上には極めて好適のものである。

それから燐炭とは余が近來唱するところのもので、之れまた非常に効多きもので之れについては大に考ふるところがあるから次に詳細の話をすることにする。

要するに右に示したやうな配合土を用ひさへすれば如何なる變味でも立派に仕立て上げることが出来る、すべて植物でも動物でも種類が進歩して優等になればなる程その性が虚弱になるのは免がれ難いこと従つてかゝるものを培養するにはその根本として土質を撰ばなければならぬ、土質が適當でなければ植物は到底惡變するのを免がれぬのである。

尙ほ植物培養家特に草花培養者の心得可きことは植物は只單に肥料ばかりを施したりとて、それで植物が立派に生育し艶麗な花を開くものではないと云ふことである丁度吾々人間にしてからが單に滋養物を食したりとてそれで身体が健康を維持することは出来ない、必らずや適宜に運動をすとか清らかなる空氣を呼吸するとか適宜の溫度を保つとか身体を清潔に保つとかと云ふやうな種々な衛生上のことに注意しないと到底満足の結果を得ることは出来ない、そ

れと同じやうに植物とても單に肥料を施したとてそれで植物が健全に培養され
ると思ふのは間違ひである、特に況んや變咲を培養して之れが改良進歩を計ら
んとするなどは抑もの誤りである。

六十六

土壤は實に肥料以外に動物で云えば食物以外にそれを健全に生育さすに足る要
素をすべて與えるものと云ふ可きである、溫度は直接に土壤が給するのではな
いが、然かも土壤は保溫力を保つて根の働きを活潑にさす作用を有するのであ
る、前に擧げた燠炭の効の一つは實に土壤に溫度を與ふる働きを持つておるの
でその効が著しいのである。

然らば土壤はすべて植物の生育を健全ならしむる要素の大部分を植物に與え
るものと云ふ可きで従つて之れに重きを置くのは當然である、いや重きを置い
て之れが改善を考えなければ到底充分の成績を擧ぐる事が出来ない、植物培

養の根本は先づ土壤にある、土壤を離れて植物は一日も生育することは出来ぬ
でないか。

此故に土壤に關しては將來益々研究す可きことが多くあつて吾々は未だほん
の一部のことしか分つていない、將來ますます草花の變咲などの優等のものを
養成するには先づその土壤との關係、如何なる土質が卅變咲に適するやと云ふ
ことから研究して掛らねばならぬ、之れ大に注目す可き點ではあるまいか。

第五話 蕒蓄と燠炭

燠炭とは蕒や麥稈や落葉其他木の小枝を焼いて炭にし之れを粉末としたもの
で、之れが近頃草花栽培上非常に効のあることが發見された、こは主として數
年前から余の主唱にかゝることで各草花培養家が各地方で諸種の草花に實驗し

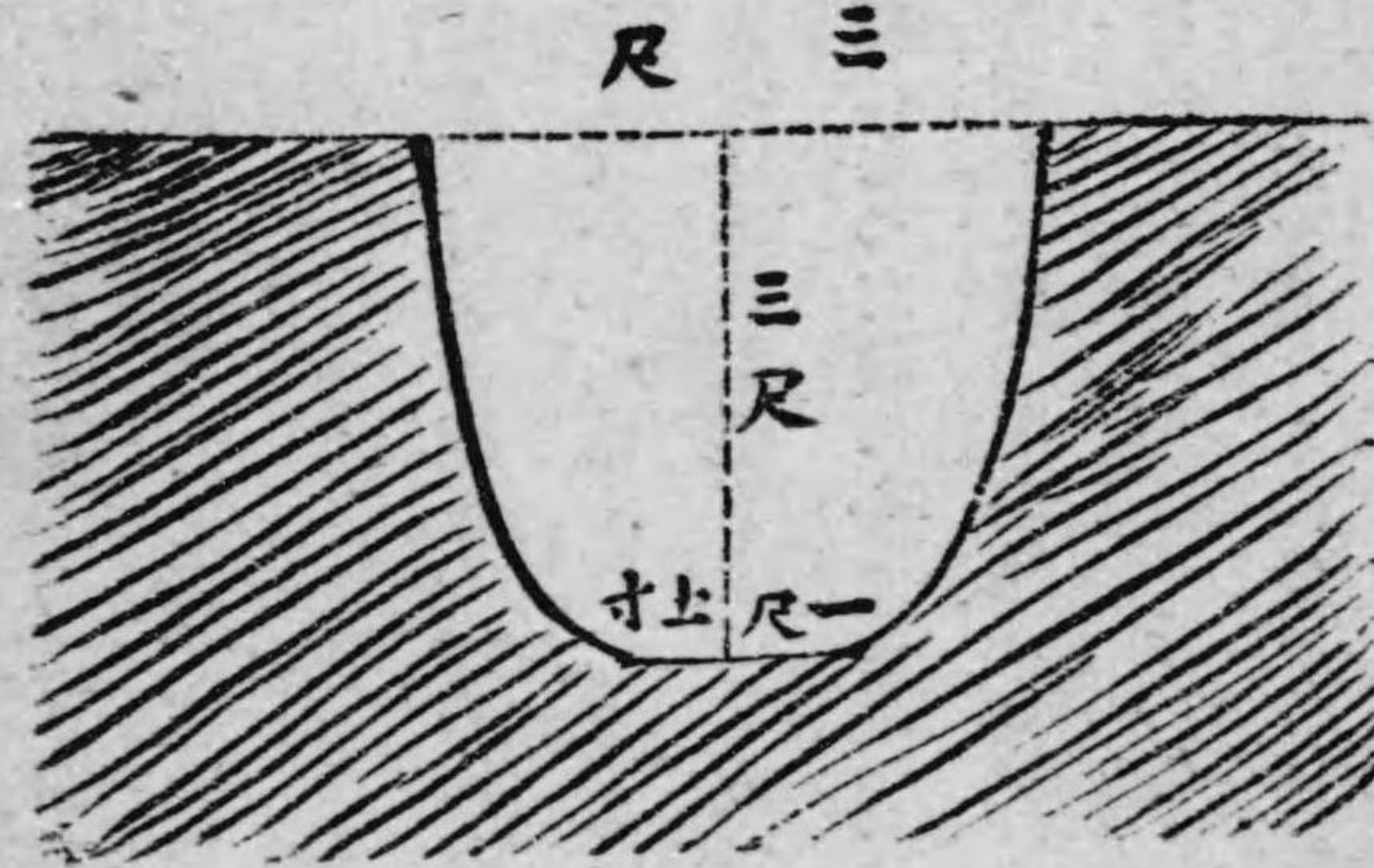
六十七

て確實に證明しておるのですべての植物に顯著なる効能のあるのである、稲や
 麥の多くの農作物は之れに依つて二倍三倍の收穫のあることもすでに實驗證明
 せられておるので農業界では今や之れが一大問題となつておる有様である、草
 花特に薔薇に對してその効の著しきことは主として余が二三年前から試みて實
 驗證明したことで、その効の偉大なることは實に驚く可きものがある、乃はち
 花は之れを用ひない場合よりも艶麗を増して色も美しくなり光澤を増し形は大
 きくなり強健となつて同一の種類でありながら従來と見違えるやうになる。
 此故に變咲を養成する場合とても人工媒助法や接木法や挿木法に依らなくとも
 單に此燻炭を巧みに用ひたばかりで従來よりも見違える様に甚だ異なつたる
 立派な花を得ることが出来るのである、況んや人工媒助法や接木法など、相待
 つて燻炭を施すときは實に立派なる珍奇な變咲きを得ることが出来るのである。

將來此燻炭を用ひることが一般に普及したならば薔薇の種類改良上一段の進
 歩を來たし實際事實に於て歐米の種類を壓倒し従つて我國より海外に輸出する
 やうな状態に立ち至るのは決して困難なことではない、我邦の風土を以てその
 効の偉大なる燻炭を巧みに利用しさへすれば種類を改良して珍奇な變り咲を得
 ることはどれだけの程度に達す可きや豫め知ることは出来ない。
 元來此燻炭なるものが一般の農作物、引いては一般の植物に大効のあるのを
 最初唱道したのは或る老農であつて未だこの効の偉大なることについては歐米
 諸國でも充分の研究がないのである、只近年獨乙の二、三の雜誌に木炭末の効
 能のあることを認めたりやうなことが書いてあつた、一体燻炭の起りは藁を焼い
 てそれを炭にしたものを云ふので歐米には藁がないから従つて之の研究が彼の
 國に行はれず却つて我邦に先鞭を著せられたものらしい。

要するに燠炭を利用することは事將來に屬して未だ蓄薇に利用して驚く可き結果を認めたるものは實は余の外にはないのである、余は敢えてその功を誇るのではなくして、寧ろ之れを大に同好者に勧めたいのである、之れ蓄薇の栽培を大に世に進歩せしめたり或はその變取を養成する上に於て大効あるを信するからである、此故に余が今此燠炭の製法とその何故に一般植物の生育に大効ある所以とそれから如何なる風に蓄薇に應用すべきかについて述べやうと思ふのである、此燠炭園藝肥料なるものは現に予の手に依つて使官上製造販賣されつゝあるけれども之れは各自の所園の落葉や塵芥に糞を混じて焼いて容易に出来るのであるから之れを用ひらるゝ場合には自分で製せられてもよい、一度製造せられたならば何時貯蔵して置いても一向に差支へがないのであるから、多少製造に手数がかゝつたとしても其後は世話がないのである。

(穴の造製炭燠)



第一圖

さて燠炭を製する方法としては先づ地面の適宜の場所に穴を掘るのでその穴は直徑四尺深さ四尺位でよろしく之れより大きくても小さくても差支へはない、次にその穴の周圍に焼かんと思ふ材料を積み重ね先づ藁の一端に火を付けそれを穴の底に落とすと火はぱつと焼え上るから直ちにその上に藁や其他のものを入れ込んで火炎が上らぬやう白い煙が絶えず上るやうに徐々に材料を上から豫め用意したる細き竹の先で掻き落すので

ある、かくて穴が一杯になると今度は濕りたる藎か又は藎を以てその上を充分に一面に蔽ふて置くこと二、三時間の後には中で充分に藎が焼けて炭になるのである。

七十二

茲に注意すべきは煙炭の効のあるのは炭であつて灰でないことである、灰になると効がないから焼く際に此ことに充分に注意しなければならぬ、その注意と云ふのは乃ち焼く際になるべく火炎の上らぬやうにすること、それから穴が一杯になつて後に充分に濕つた藎や藎を載せて置くことで之れさへ守れば誰にでも完全に藎の炭が焼けるのである。

さて煙炭が何故に草花やその他の植物に効があるかの理由を述べなければならぬ、此理由を述べるについては勢い植物全体に涉つたことから、べないと充分に合點が行きにくいから、或は直接に藎に關係のないこともあるかも知れ

ぬが之れを、べることが必要であるから讀者は能く趣味せられんことを希望する。

先づ第一に煙炭は其本来の性質として肥料分を驚く可く吸収する力を持つておる、此理は從來全く人の氣付かぬ事柄ではなかつたが具体的に説明するのは今度が始めてある、單に肥料分を吸収するばかりでなく併せて之れを保有すること乃ち吸収保有すると云ふ性質を持つておる此性が至大な効があるのである。

今人糞尿や其他の肥料を其まゝで田や畑に施した場合を考ふるに肥養分の大部分は實は他へ逃げ去つて實際に植物の根に吸収されて其生育を助くるのはほんの一部分に過ぎぬ例へば人糞尿や魚肥や其他の肥料を畑へ施せば其臭氣は餘程遠方から嗅ぐ事が出来るではないか、こは乃ち肥養分中の大切な窒素分

七十三

が「アンモニア」の形で逃げ去るのである、此空中に逃げ去る養分の量を數字で何程であるかと云ふことを一々示す事は出来ぬが何人が考へても成る程其量が多いものであると云ふ事に異議なき筈である、且つ又肥料分は雨が降れば必ず一部分は遠方へ洗ひ流されると云ふ事もあり、或は作物の根の達しない深き土中に浸み込みなどして結局作物の根に吸収さるゝ分量は僅かな量であることは合點が行く筈である。

然るに今此人糞尿や其他の肥料を燻炭に吸収させて燻炭肥料として田畑に施せば何うであろうか肥養分は空中にも逃げず水にも洗ひ流されず況んや土中深く浸み込みもせず、悉く作物の根に吸収さるゝやうな状態に置かれるのである。炭が斯様に吸収力を持つて居ると云ふ事は從來便所の臭氣を止めるために炭の粉末を使つたことや又は悪水を濾すに炭を用ゆるなどの簡單な例を見れば充分に分るではないか、現に臭氣紛々たる人糞尿をば燻炭に吸収させて燻炭肥料とすると俄かに臭氣が止まる、手に握つて鼻の先きに突き付けても不思議にも臭氣を感じない、之れを見ても如何に炭が作物に大切なる臭氣乃至は肥養分を保ち有して逸せしめぬか分るではないか、されば燻炭肥料を作物に施したならば丁度肥料の容器を作物の根の傍に置くと同様で作物の根は欲するが儘に其容器から肥養分を吸ひ取る事が出来て然かも少しも他に養分の逃げる處がよいから作物に對して如何に有效なる作用を有するか誰にも合點が行く筈である。

第二、炭は又本來の性質として温度を吸ふ力を持つて居る黒色の物が太陽の熱を吸ふ位の理は何人も知れるところであるが燻炭肥料も其黒色が故に従つて温度を吸ふ力の強きは明らかである、昨年の夏予は燻炭肥料を施した畑と施さぬ畑との温度を較べて見たが施した方の畑は遙かに温度が高く平均五度位の

七十五

差を生ずることを確めた、日に由つては六七度の差を生ずる事すらあつた、此五度の差は植物の生育をどれ丈の程度に助けるかは之れを具体的に示すことは出来ぬが要するに植物の生育と温度とは甚だ密接の關係のあるもので或は肥養分の關係以上に植物の生育を助けるかも知れぬ、其證據には植物は動物の如く現今地球が太陽から受くる熱が高きに過ぎたがために害を受けたと云ふ例は未だ曾てない、太陽の熱を受くること最も多き熱帯地方で植物が最も良く繁殖しておる、此地方では温度が高きがために植物が四季を通じて花を開き實を結んで居る。

又近來頻りに流行する温室で冬季自由に植物の栽培が出来るのは決して養分の爲にあらで全く温氣を興えるがために寒き季節に苺や西瓜が果を結び「すみれ」や薔薇や其他の草花が花を開くのである。

昔時の饑饉年は何のために起つたかと調べて見ると主として温度の不足からである、土用中に裕を着るやうな年は必ず大饑饉であつた、暑さの烈しい歳は誠に作物に都合のよい年で現に大体に於て豊年と云ふ可き結果を生じている、暑いのは人間には苦痛を興えるが植物には快樂を興えるのだ、此理から見れば植物と温度との關係は實際上に於て從來の學者が考たよりもより以上の密接の關係があると云はねばならぬ、僅か一度の温度の高低も植物の生育に取つては大關係を有するのである。

斯様な次第であるから燻炭肥料が此温度を吸収して土地の温度を高めたが植物に好影響を及ぼし其生育を助けると云ふ事は實に此肥料の有する絶大の效力ではないか。

第三に燻炭は粘土質の土地に施せば其質を膨軟ならしめ空氣の流通を良くし

或は有害なる化合物を分解して植物の根の發育を促す働がある、之れまた見逃すことの出来ぬ大なる效力で近頃頻りに各地に行はれておる排水法の效果の擧るのは皆人の知るところであるが排水を行ふと植物の生育が盛んになり従つて増收があるのでそれで各地方では大仕掛の機械で之れを行つて居る次第であるが此排水をする理由は主として土地より過多の水分を減じて空氣の流通を良くするから其效が擧るのであるが今燐炭肥料を施すと恰度此排水と同様の結果を來たすのである、乃ち燐炭が土地を膨軟にすると同時に空氣の流通を良くし加ふるに濕地に生ずる植物に有害なる物質例へば有機酸類其他の有害物を吸收分解する力を有して居るのである。

近頃獨乙の雜誌に次のやうなことが載つておるのを見た。

「元來植物の根は常に空氣を要するものであるが、若し土質が粘土質や

其他の原因で粘着して空氣の竄入が自由でない場合には之れがために自己の体から有害の酸類を分泌して其根を害するものである之れを防ぐには炭を用ゆるのが最良である。

かやうに獨逸などでも己に炭の效用に氣が付きかけた然かしまだ燐炭肥料を用ゆるの程度には至らぬ尙ほ獨逸では右の理を應用して市街の兩側に植物を植える時に從來のやうに根の廻りに空地を残して置くことをせず只述を根の周圍に置いて上に石や「セメント」が詰めてあるそうだ、もしそれで充分に植物が生育するとせば之れ實に無益の地面を有用に使用することが出来ると云ふもので之れもやはり燐炭の效である。

第四に燐炭は多少植物の早害に罹るのを防ぐ效もある、それは炭は其性として吸水力に富むものである故に降雨少なく水分不足な場合には炭は深き土中から

或は夜間空中から氣濕を吸収して之れを作物の根に供給する作用をも爲すのである。
八十

右の外燻炭は尙ほ消毒的の效をも有するのであつて以上述べたるところに依り大体燻炭が如何に植物の生育上大なる效があるか、明らかであると思はれる。此故に之れを一般草花に應用してもその效の偉大なるは驚く可きものがあつて、先づその花の大きさを増し色澤を艶麗にし開花期を長くするなどの種々なる效果が見はれるのである、之れを薔薇や其他の草花に用ゆるには單獨に用ゆる場合とそれから之れに肥料を吸収さし或は混合して所謂燻炭肥料として用ゆる場合とがある、或は又畑土に混合して用ゆる場合などがあつて、之れ等はその種類と時と場合とに由つて大に異なるものであるから委しきことは後に述べることにする。

要するに燻炭や燻炭肥料を草花特に薔薇などに用ひることは日尙ほ淺きに關はらず偉大の效果が見はれておるのであるから、將來段々経験を積んで巧みに之れを利用しさえすれば尙ほ益々著大の効を見はすことは疑ひない従つて薔薇培養上にも一段を進歩を來すであらう。

第六話 薔薇と肥料

植物も動物と同じやうにやはり食物がなくては生育しない、肥料は頂度植物の食物に當るので従つてその必要なるは言ふまでもない、特に草花などに艶麗の花を開かすのは全く肥料の力である、いくら優等な種類でも充分に肥料を與えなかつたり、或はその他の手當てが悪いと決して豊艶なる花は開かない、終には元の劣等種に還るのである、單に色澤や大さばかりでないその馥郁た

る芳香も悪臭ある肥料から来るのである。

此故に種々なる方法に由つて苦心して折角造り上げたる變咲も適良なる肥料を用ひて能く之れを培養しなくては到底之れが優等種に養成することが出来ない、肥料の効力は偉大なもの云はねばならない、従来多くの草花培養者も中々肥料のことには重きを置いて随分苦心したものであるが多くは肥料に關する智識に乏しく主として油粕類を用ひて之れのみを無上の好肥料としておつた、之れが抑もの誤りである油粕も悪しくはないがそれよりか一層も二層も良好なる肥料があつて之れを用ひなければ到底草花引ひては薔薇の改良は出来ないのである、前話に述べた燻炭肥料を用ひることも第一に勉めなければならぬことではあるが尙ほ茲に注意すべきは薔薇を始めその他の多くの草花で盆栽にしたり或は庭前近く植するもの、肥料として、成る可く取扱に奇麗で便利で悪臭

がないものでなければならぬと云ふことである、草花を培養すると云ふことがすでに趣味から来るのである直接の實利主義から来るのではない、此故に幾ら能く効能のあると云ふ肥料でも人糞尿であるとかその他油粕を腐熟したものであるとか云ふやうな悪臭を放つものではどうも面白くない、それも他に適良の肥料がないならば或は仕方がないかも知れぬが他に種々の好肥料があるのであるから之れを用ゆるにこしたことはない、今次にそれ等について述べたいと思ふ。

茲に注意すべきは以下に述べる肥料は何れも之れを溶液にしたり或は固形のまま燻炭に吸収さし或は混合して用ひるを良しとすること、乃ほち燻炭肥料として用ひるやうにするのが一番有益で効力の多しことである、その利益とするところは種々あるけれども燻炭肥料として施す際にはどんな悪臭ある肥料で

も人糞尿でも決して臭氣を放たぬことである、不思議のやうに臭氣がなくなる
之れ直接に貴ぶ可きことではあるまいか。

(一) 智利硝石

智利硝石は窒素肥料であるが赤褐色を帯びたる乃至は白色の水に溶解し易き
無臭の結晶粉末であるから薔薇の肥料として取扱に便利で清潔で他の肥料の
企て及ばない點がある、此ものは天然に南米「ペルー」及び「ポリビヤ」等に
産し主として智利に産するから此名のあるもので以前から多少は輸入されたも
のであるが近來は非常の勢で年々我邦に輸入されておる、現今では段々草花肥
料に用ひらるゝことが多くなつて來た。

此ものは百分中平均十五「パーセント」の素窒を含みその窒素は硝酸の形態
で存在しておるから易く直ちに植物の吸収に適するものである、之れを薔薇に

施すにはその百匁を水四斗の割合位に溶かして水溶液として注ぎかけるか或は
燻炭に吸収させて施すのがよろしけれども他の燻炭や加里肥料と適宜配合して
用ひなければならぬ。

智利硝石は空氣中から水分を吸収する性があるから之れを貯蔵するには瓶若
くは桶空樽などに入れて密に蓋をして置かなければならぬ。

(二) 硫酸「アンモニア」

此ものはその純粹なものは無色透明の結晶であるが通常肥料として賣つてお
るものは灰色やら又は黄色、青色を帯びておるもので智利硝石のやうにやはり
悪臭がないから之れを燻炭肥料や加里肥料と加味して施すとその効も著しくす
べて取扱に便利である。

硫酸「アンモニア」は主として石炭瓦斯製造の際に副産物として多量に産出

せらるゝもので近來は人糞尿や塵芥中からも製出する法が發明せられた、未だ現今では我邦の産額は少ないから外國から輸入せらるゝ有様だ。

硫酸「アムモニヤ」も前の智利硝石のやうに濃厚な肥料であるから之れを施すには土とか燐炭とかに混じて施すか或は又硫酸「アムモニヤ」百匁を水三斗位に溶解して燐炭に吸収さして施すのがよい、頂度此割合は人糞尿の含んでおる窒素の量に相當するのである。

(三) 硝 酸 加 里

此ものは又硝石と唱えられておつて窒素と加里の二成分を含んでおるから之れ等の二成分を同時に植物に供給し得るものであるから誠に都合のよい好肥料であるけれども、その價格が高いから一般作物の肥料とするには少し不適當である。

然かし草花や盆栽などに施すには多量を要するものでないから適當である、之れを施す方法は智利硝石など、ほゞ同様でよろしく價の高きを問はずに只植物の生育のよくなるのを目的とするとか或は品評會に出すために逸品を作り出すとかと云ふ場合には此硝石を用ひるにこしたことはない特に之れが水溶液(水四斗に硝石百匁の割)を燐炭に吸収したものなどはその効驗實に著しく恐らくかゝる肥料に及ぶものは他にない、此肥料は特に薔薇に好適である、園藝肥料として世上に多く販賣せらるゝもの、内で少しく高價で良好なものには必ず多少の硝石が混じておるのである。

(四) 過 磷 酸 石 灰

過磷酸石灰は近來磷酸肥料として廣く用ひらるゝものでその植物生育上に大効あること一般に認められておるものである、此ものは普通磷酸石に硫酸を

注いで製せらるゝもので先づ燐礦石を砕いて之れに硫酸を注ぎ、攪拌すると直ちに化學變化が起つて過燐酸石灰が出来るのである。

過燐酸石灰は何れの作物にも有効であつて草花肥料として臭氣のないこと、取扱に便利な點から適當であるばかりでなく之れを使用すると花を多く開きその色澤は艶麗なること著しい、此過燐酸石灰は元より燐酸肥料であるから、之れに適宜窒素肥料と加里肥料とを加味して施す可きもので單獨に施すことはその効が少くない、又之れを施用するに當つては種子や植物の莖葉や又は根に直接に觸れないやうに注意しなければならぬ、之れ此肥料は強く酸性反應を有するから之れを直接に觸れさすと種子の發芽力を害したり或は作物の生育力を害する恐れがあるからである。

(五) 加里質肥料

加里肥料としては炭酸加里、硝酸加里、硫酸加里などの種々あれども本邦で最も普通でそして經濟的のものは草木灰である、然るに近來獨逸國「スタツスフルト」で天然の加里礦石が發見せられて盛んに採掘せられて之れを肥料に施用するに至つた。

該地方で産出する加里鹽には種々あれどもその主なるものを擧ぐると、

「カルナリット」 「カイニット」 「シルビン」 「ポリハライト」

「シルビニット」

などで我邦に近來多く輸入されておりて薔薇の肥料として最も好適なものである。

「カルナリット」は褐赤色の結晶体で濕氣を吸收し易り其成分は主として鹽化加里や鹽化苦土から成り立ち加里の含量は九乃至十一「パーセント」位である。

「カイニット」は白色の結晶体で多少黄赤色の礫塊が混じておる、此ものは鹽化苦土や食鹽に富めるもので濕氣を吸収する力が強く取扱上注意せねばならぬ、含める加里の分量は一二、五乃至二三、五〇に達しておる。

「シルビニット」は近年肥料として多量に施用せらるゝもので極めて鹽化物に富み含める加里の分量は一五〇乃至二〇〇に達しておる。

以上の三種はそのまゝ肥料として販賣せらるゝことも多けれどもまた之れを精製して硫酸加里又は硫酸加里苦土として施用することが多い、硫酸加里は草花肥料として最も適當なもので純粹のものであるから少しも何等の故障なく善養にも好適である。

(六) 灰類

灰は主として加里分を含み又磷酸や石灰を含むから肥料として効の多いもの

で善養に用ひて良好な肥料である、また灰は肥料として効があるばかりでなく魚肥や油粕のやうな脂肪分の多いものに混すると其脂肪を脱却することが出来るし又酒粕や「アルコール」粕などのやうな酸味を帯べる肥料に混すると其有機酸を中和するの効があるから之等の肥料と混用すると効が多い。

灰類の成分は其原料である植物の種類に由つて異なるは勿論また同種の植物でも其部分を異にするに由つて多少の差異があるものであるから灰を用ひる場合には之れ等のことにも注意しなければならぬ一般に云ふと針葉樹の灰は潤葉樹の灰に比べて養分が乏しくまた稿稈類の灰は針葉樹の灰と較べて更らに劣つておるのである。

(七) 油粕

油粕とは菜種、大豆、綿、胡麻、亞麻などのやうな脂油に富める種子から油

分を搾り取つた殘粕を云ふもので、大概窒素に富んで草花栽培上從來廣く使用したものである、中にも需要の最も多いのは大豆粕と菜種粕である、油粕は成るべく油分の少ないものを撰ぶのがよろしく、すべて施す前によく搗き碎いて粉末としてそのまま用ゆることあれども多くは積みて堆肥に混じて適宜に醗酵して後施すのがよろしく特に油分の多いものには草木灰を混じて醗酵させるのがよろしい、概して油粕は醗酵作用が激しく蒸熱の發生することが強いからそのまゝ應用するときは往々種實の發芽力を害したり或は作物の幼根を害するの虞があるから之れを施用するに當つて注意することが肝要である。

大豆粕は普通の菜種油粕に比して窒素を含む量が多いけれども磷酸を含むことが割合に少ないから之れを施用する際には適當の磷酸を含める肥料を加味して施さねばならない。

菜種油粕は油粕の中で大豆粕に次で其産額が多く含めるところの三成分の割合の比例が適度を得て居るから各種の草花に使つて決して失敗を招くやうのこととがなく、どんな素人が用ひても危険の患がなくてよい。

油粕は大豆粕を除くの外は性質上不正の雜物を混合しても一寸分らないから従つて不正贋造の品が多くその混ぜ物の主なるものは土壤、木皮、鋸屑、柿の澁などで支那から輸入した油粕には常に泥砂の混じてあるものが多いからよく注意しなければならぬ、今油粕類の成分を示すと次のやうである。(百分中)

種類	水分	有機物	窒素	磷酸	加里
菜種油	一一三	八三〇	五〇五	二〇〇	一三〇
大豆油粕	一〇三	八〇九	七六七	一一〇	一五八

棉實粕	一一、二	八二、二	六、二一	三、〇五	一、五八
胡麻粕	一一、一	七九、六	五、八六	三、二七	一、四五
亞麻仁油粕	一一、二	八二、七	四、七二	一、六二	一、二五
楮玉油粕	一五、〇	八二、〇	一、一六	〇、四三	〇、七七
豆子玉	一一、六	八三、六	四、二八	一、九〇	一、二一
落花生粕	一〇、四	八五、六	七、五六	一、三七	一、五一

(八) 糠 及び 麩

糠は元來磷酸に富めるもので昔から使つたもので骨粉や過磷酸石灰などの磷酸肥料のまだ日本に知られない時分には甚だ珍重されたものである、何れの草花に用ひてもその効多く蓋薇に用ひてもやはり効が多い、之れを用ゆる場合にはそのまゝ用ゆるも宜しけれども堆肥に混じて腐熟さすのが最も宜しい。

大小麥の麩は其性質効用略ぼ米糠と相似ておるその肥料養分の多少から云ふと裸麥の麩が最も優等で糠にも優り小麥麩が是れに次ぎ大麥麩が最も劣つておる。

(九) 堆肥

堆肥とは家畜の糞尿や藁稈の類を混じて積み重ね能く腐熟さして作る肥料を云ふもので有機物に富み三成分を程良き割合に含みその能く腐熟したるものは一般植物の肥料として誠に適當である、蓋薇の變喚を養成する場合などには是れを用ひねばならぬことがある、此ものほもと家畜の糞尿などが混じておるから従つて盆栽物などに用ゆるには不潔であるやうに思はるゝけれども燐炭と等分に混じて用ゆる場合には少しも悪臭なく且つ極めて清潔の肥料となるのである。

油粕などを用ゆる場合にも一旦堆肥に混じて腐熟せしめてそして之れをやはり等分の燻炭と混じて施すのが最もよいのである。

九十六

此肥料の原料は別に定つて居ることなく、どんなものでも圃場の周囲の廢棄物乃ち藎でも落葉でも草花の軟かき莖葉の類でもあらゆる植物性の軟かきものならばすべて原料とも可く是れ等を牛馬糞や人糞尿と能く混じて小屋の隅に積み重ね時々切り返して腐熟さすやうにせば盛んに腐敗醱酵作用を起して誠によい肥料が出来る、尙ほ原料に魚類の廢棄物を使へば一層効が多い、是れが成熟する時期は氣候の工合に由つて元より一樣でないが四、五ヶ月乃至八ヶ月も経れば大抵のものは充分腐熟するからその時を見計らつて使用するがよい、是れを積み置く間にはその場所や設備があまり不完全であると永き間には養分の損失が少なくないから注意が肝要で先づ雨に濡らさぬやう充分設備すること床

は三和土か或は煉瓦で敷き詰めて置けば最も宜しい、只の土の上だと云ふと永き間には養分の土中に浸入することが多い、之れ等の成分の損失を妨ぐに最も良き方法は燻炭を利用することで燻炭を堆肥の表面一体に振り掛け置くとか特に地上の周圍に施し置く成分の損失がないばかりでなくその臭氣が全く無くなるのが妙である。

堆肥は他の肥料に比べてその効果が徐々であるけれども之れが永く續くから作物の生育が整一になると云ふやうな良い點がある、その他堆肥は有機物を含むことが多いから土壤の氣水の透過作用を完全にしてその理學的性質を改良するの効が少なくない、特に重粘土に施す際に其効が著しい。

且又堆肥は土壤の保溫力を増加さす効がある、是れ堆肥の腐敗分解するとき腐植質を生成するから土壤の色が黒くなり爲めに土壤は溫熱を吸収して是れ

九十七

を保管するの作用の多くなるからである、之れ燐炭と相似た點である。

右の外堆肥は間接に他の養分を分解して植物に吸収し易からしむる効もあるから堆肥は肥料として重要な地位を占めて居るので特に薔薇の實蒔を行ふ際などにはこれを等分の土壤と混じて多量に施し置けばその生育上著しい効がある、これを施すに當つては氣候の温暖な地方或は温暖な季節には腐熟の若いものを用ふるもよろしけれども氣候の寒冷な地方や又は寒冷な季節にはなる可く腐熟せるものを用ひねばならぬ。

要するに堆肥は誠に温和な肥料であつてその効たるや早からず遅からず頂度程よき工合に植物の生育を助くるものであるから和洋草花の何れでも種を蒔いたり移植したりする場合には是非其多少に拘はらず是れを用ゆるがよいのである。

(十) 肉 粉

肉粉とは近來外國から輸入せらるゝ一種の動物質肥料で、これは家畜の臟腑、肉屑等のやうな屠畜場の廢物を蒸熱壓搾して製するもので其原料の種類及び配合等の如何に由つて其含有成分は一定しないけれども窒素は七乃至九「パーセント」に達するのが普通で尙ほ多少燐酸をも含んでおる。

此肥料は近來大分我邦に輸入せられておるもので成分は濃厚なるに加ふるに脱脂したものであるからその分解が容易で肥効も亦極めて迅速である。

(十一) 骨 粉

骨粉は獸類の骨を碎いて製するもので元來獸類の骨は何れも燐酸質に富んでおるから燐酸肥料の原料として使用し來つたもので主として骨粉を製する原料とするのである。

骨粉は其製法の工合に由つて粗骨粉蒸製骨粉膠骨粉の種類がある、蓄薇の肥料に用ゆるのは主として蒸製骨粉で此ものは生骨に高壓を加えて蒸熱して之れを粉碎したもので其目的は骨粉をして粉碎を容易ならしめ且つ脂肪を除いて肥効を多からしめんとするにある、元來骨粉は粒が細かい程効能の多いものであるから細粒のもの程貴重せられておる。

(十二) 硫酸鐵

硫酸鐵は直接間接に植物に効用あるもので、蓄薇などにその稀薄の溶液を施すと大にその生育を良くする傾がある。元來鐵は土中到處に多量にあるもので従つて肥料として價値なきものとせられておつたが此説は誤りらしい、

現に余は之れを用ひて大に好結果を奏しておる。

以上述べた肥料の種類は蓄薇肥料として有効なものであるばかりでなく種々なる點に於て多くの肥料の内でも優つておると思ふもののみを述べたのである、此外肥料の種類は元より多いのであるが之れ等を用ゆるのが最も良いのである。

之れ等の肥料を施すには成る可く單獨に施すことなく適宜に調合して燻炭に吸収したり混合して施すのを最も良しとするので如何なる分量にす可きやとか或は如何なる時季に施す可きやについて次に述べやう。

第七話 蓄蓄變咲と施肥法

幾ら適良なる肥料を撰び用ゆるとも之れを施す分量と時期とそれから施す方

法を誤れば到底その目的を達することは出来ない、特にその變り咲を養成する場合にそうである。

元來前にも述べた通りに蓄薇にしても他の草花にしても肥料の關係に由つてその花の大小色澤の良否を來たすものであるばかりでなくその性狀の變化をも來たすものであるから變り咲を養成する場合には特に肥料のことも注意しなければならぬ人工花粉媒助法や、接木法や實蒔其他の方法に由つて變性を來たさして種々の變咲を得たにしても肥料に注意せずして培養の法を怠れば漸次惡變するのを免れない、如何なる場合にでも植物の食物たる肥料はその生育上重大な關係を持つておるのである。

先づその施す方法について述べると一体肥料はあまり根際に接して施すべきものでなくして根が直接に肥料に接すると却つて草木が萎縮する恐れがある、

元來植物の吸収する養分は極めて稀薄に水に溶解したものを吸収するのであつて少しく濃厚に過ぐると直ちに害があるものである、彼の尿を植物に直接に注ぎ掛けると植物が枯死するのは全く之れが濃厚に過ぎるのである、世人は往々草木の根際に接して肥料を施す傾があるがあれは余程氣を付けなければならぬ、折角肥料を施しても却つてそれが害になつては非常の損害ではないか。

されば蓄薇を培養するに際しても肥料を施すには根際より少しく離れる土を掘つて施さねばならない、その根際から離れる程度は先づ蓄薇が四方に擴げたる枝頭より垂直に地上に線を下しその下れる點と根元との距離を半經とせる圓を書いてその圓側に沿ふて數寸の深さの溝を掘りその中へ肥料を施し置くのが最もよいけれども植物の小なるものとか或は列をなして植え込みてあるものは一々右様の方法を取るわけに行かぬから場合に應じて便宜の方法を取るがよい。

それから肥料の種類にも由るけれども前に述べた燐炭肥料とか或は單獨に用ゆる肥料などでも土と等分に混じて施すのをよしとする、要するに肥料は一時に多量に作物に吸収さす方法を探るよりも少量に徐々に吸収さす方法を探るのが良いので蓄積には特に此方法を探らねばならぬ。

また草花肥料は一般に農作物に施す肥料とはこと違ひ成る可くよく腐熟分解したもの施さねばならぬ、之れには種々の原因があるけれども要するにまだ腐熟しないものはどうしても施した後に臭氣を發する場合が多いのと花を急に開かすやうな場合には充分に分解した肥料でないときゝめが早く現れぬためである。

次に施肥の季節について少しく述べることにするが元來肥料を施すにはその季節を誤るやうなことがあつては常にその効果を收むることが出来ないばかり

でなく却つて植物に害を興えるやうなことがあるからこの施肥の時期について極めて注意を拂ふことが肝要である、嚴に其季節を誤つてはならない。

古から此施肥の季節については園藝家などの誤が色々あつて種々なる説を唱える人も少くないが、要するに植物生理上から云ふてもまた經驗上から云ふても大体は定まつておるものである。

乃ち蓄積では四季咲のものでは四季を通じて施す必要があるもので少くも年四回に施しその期間には稀薄の液肥を度々施さねばならない、乃ち特に開花を促がさんとする場合とか美大艶麗の花を開かせんとする場合には特に施さねばならない、然かし一般から云ふと早春すべての植物の生育機關が之れから發動しやうと云ふ時期には必ず充分に施し置くのをよしとする。

右のやうな季節に施すのは只に植物の生育を促すと云ふ目的の場合にのみ標

百六
準とすべきのであるが、然かし草花栽培や盆栽を作る場合には單に植物の生育を促がすのを目的とするものでなくして、場合に由りてはその反對に生育を停止することさへある位であるから従つて施肥の方法と時期とが一層困難になるのだ。

要するに草花や盆栽は一方植物の生育を助け他方に於ては之れを妨げると云ふやうな方法を探らなければならぬ場合があるのだからそれ〴〵各種類について述べる必要がある、例へば種々の草花について所謂變り物を作る場合などは特にそうであつて、一方葉の大を欲すると同時に他方には成る可く莖を伸さぬやうにするとか或はまた一方莖葉の成長をなる可く止めて花のみを美大にするとか云ふやうな工合に或る一部の機關の働きを止めて他の機關の生育をのみ計ると云ふやうなことは普通に行ふ方法であるからそれ〴〵肥料の使ひ方やらま

たは撰み方が複雑になるのだ。

さて蕃薇の肥料としては従來は例の油粕や干鰯の類を用ひて居つて時々魚類の洗汁を灌水の代用にしたものであつたが、かゝるものではとてもその芳香や美を増すことは出来ない、之れに好適の肥料としては前に述べた智利硝石硫酸「アムモニア」や肉粉や骨粉乃至は過磷酸石灰や木灰などて芳香を増す肥料としては米糠がよいやうである、どうも米糠と芳香との間にどんな關係があるかと云ふことはまだ充分に分らぬが余の實驗に由るに兎に角米糠を施すと芳香を増すやうである、之れはなほ能く研究したならば面白い關係があるに違ひない。

- 余の經驗上一般の蕃薇に良好なる肥料としては次のやうな配合肥料である。
- 硫酸「アムモニア」二分
- 骨粉二分
- 米糠二分
- 木灰一分
- 肉粉一分
- 堆肥二分

右を能く混合して之れを等分の燻炭肥料に混じて施すのがよい。
要するに之れは一般の薔薇の標準肥料の例を示したもので必ずしも之れ等の種類の肥料を用ゆるに限ると云ふのではないから之れを標準として取捨するがよい、特に變咲を養成する場合には次の分量のものを良しとする。

智利硝石二分

カイニツト二分

木灰一分

米糠二分

過燻炭石灰一分

堆肥二分

右の配合物を等分の燻炭肥料に混じたるもの、要するに此配合肥料は余の實驗と學理上から割り出したもので何を従來のものよりも異なつた變咲を養成する場合には極めて適良のものである。

それから尙ほ一般草花に對する燻炭配合肥料の例を示して参考のために次ぎに擧げることにするから薔薇栽培家は能く之れが利用の途を講せられれば利す

るところが多かろうと思はるゝ。

第一號草花肥料

燻炭 五貫目

人糞尿 五貫目

第二號草花肥料

燻炭 五貫目

堆肥 五貫目

第三號草花肥料

燻炭 五貫目

油粕 四貫目

木灰 一貫目

第四號草花肥料

燻炭 五貫目

骨粉 二貫目

魚肥 三貫目

第五號草花肥料

燻炭 五貫目

智利硝石三貫目

木灰 二貫目

第六號草花肥料

燻炭 五貫目

硫酸「アムモニア」三貫目 過燐酸石灰二貫目

第七號草花肥料

燻炭 五貫目

大豆粕 三貫目 骨粉 二貫目

第八號草花肥料

燻炭 五貫目

鶏糞 三貫目 木灰 二貫目

第九號草花肥料

燻炭 五貫目

馬糞 三貫目 過燐酸石灰 二貫目

第十號草花肥料

燻炭 五貫目

肉粉 三貫目 木灰 二貫目

第八話 人工媒助法

薔薇を始めとしてすべて草花の變咲を養成するに最も好適なる方法は人工媒助法である。變咲を養成するには實時法もあり接木法もあるけれどもその變化の劇しくしてそして變咲を得易き法は人工媒助法に及ぶものはない。

元來多くの草花は萼と瓣との外最も花に取つて肝要なる器官である雄蕊と雌蕊とがある、此雄蕊と雌蕊は花に由つて完全なるものがあるし或は不完全のものがあつて一定しない、一体花の瓣や萼や雄蕊や雌蕊は互に相變化しやすきもので雄蕊が瓣に變じたり或は雌蕊が瓣に變じたりまた此反對で瓣が雌蕊に變ずるなどその變化が時と場合に依つて共通のものであつて従つて雄蕊の全体が悉く瓣に變じておる場合もある、かゝる場合には元より人工媒助法を行ふこ

とが出来ぬのである。

元來薔薇でもその他の草花でも重瓣の千重八重のものはその元をたゞすと始めはみな單瓣で簡單なものであつたのであるが人工培養や其他の境遇の結果で千重、八重に變化したものであつて多くの優等の種は雌雄蕊の不完全なものが多ひ、従つて之れ等は人工媒助法に由つて變咲を得ることが出来ぬから接木法などに由るより外に仕方がない、然かし雌雄蕊が全く欠けて居る場合の外は不完全なものでも人工に由つて人工媒助法を行ふことが出来る。

自然の状態に於て花粉が互に交雜する場合を考ふるに或は風の爲めに或は昆虫の爲めにその媒助をせらるゝものであつて薔薇などでは主として昆虫の爲めに媒助せらるゝものである、昆虫は花瓣や芳香をたよつて花に來りその底に貯えられたる花蜜を吸はんとする際にその花の花粉が自然にそが体に附着して他

他の花に至れる際に他花の雌蕊の柱頭に落下して茲に受胎作用が起つて結實するに至るのである。

雄蕊の花粉が雌蕊の柱頭に達するとその花粉は糖液を得て發芽して花粉管を出して組織内に深く入り込み以て雄性の成分を子房に附着して茲に受胎作用が完成して所謂交雜作用の結末を告げるのである。

かく自然に花粉の交雜する場合は種々あつて、今之れを擧げてみると、

- 一、同一花の雌雄蕊が交雜する場合
- 二、同種間で異花の交雜する場合
- 三、異種類の交雜する場合

であつてこれは薔薇のみについて云ふ場合であつて珍奇な變咲を出すのは元より第三の異種類の交雜する場合に限るのである、かく自然の状態に於ても此異

種類の交雑に由つて變咲を得ることはあるが、かくては元より望むところのものを得ることが出来ないから之れを己が望み通りのものを得んとする目的で行ふのが乃はち人工媒助法である。

今その實例と方法とを示さんに薔薇の優等種たる白黄と大鵬とを媒助し白黄の種子より一種の新種を造り出さんと假定せんに白黄は花粉を受く可きものなるに由り、媒助の施行の前日の午後か或は夕方に豫め明朝開花す可き白黄の花の花瓣を損せざるやうに注意して徐々に且つ緩やかに瓣を開き鋏刀にてその藥を截り去つて自花交雑を不可能ならしめ置き、さて翌朝満開したる時期を見計らひて更らに大鵬の初めて開きたる略ぼ同齡の花を見立て、摘み來りてその花粉を黄白の花心に直ちに附着せしむるか或は細筆の先にて豫め黒色に塗抹したる黒紙上に花粉を墜落集合せしめたるものを再び細筆の先端にて柱頭に附着

せしむるのである。

かくて望むところの花粉を交雑せしめた後は光線を透過し得る紙囊のやうなものに被ひて虫や風のための自然的の交雑を防ぐやうにす可く紙囊は雁皮紙に精蠟を溶解して塗抹したるものを袋に製して一方の口をして開口自在として一晝夜の後を受胎した程度を計つて袋を除去するのである。

かくて花粉が柱頭に附着して後は糖液を得て花粉管を出すものであつて花粉管の發芽するには温度と適當なる糖液とを得なければ萌芽生育して受胎作用をなすものではない、中にも温度は植物の開花する際にはすでに適温に達するものであるから人工を加えて左右するの必要がないけれども糖液に至りては花管の生育に影況を來たさしむるもので水を吸収しても萌芽しないことはないけれども、此故に人工に由つ

て糖液を加えて花粉管の發育を促す場合があるけれども、薔薇に於てはその必要はないらしい。

さて甲と乙との種類を人工媒助をした結果如何と云ふに普通の場合には兩性を兼ねたその中間のものが出来るのであるが通常であるが時としては父性に多く似る場合も母性に多く似る場合もあつて花の色澤にしても必ずしもその中間の色合のものが出来るとは限らない、要するに媒助の結果は豫め豫想するこゝとが出来ぬのである。

またその媒助の結果極めて珍奇艶麗な變咲を得たにしても之れを培養する方法が當を得ないと段々惡變するのを免かれない、然かしその反對で培養の方法が適良であればその種類は益々改良されて益々優等の種類となるのである。

此故に人工媒助法を行つてその効果を全つたからしむるにはその後の培養法

に注意をしなければならぬ。

尙ほ茲に述べ可きは直接に手を下して花粉の媒助をなす人工媒助法でなくとも半ば人為的で半ば自然的の方法がある、それは主として珍奇な變咲を得んとする場合であつて豫め撰びたる數多の種類を交雜して植え置くか或は實時に置いて置くのである、かく色々の種類が交はつて花を開いて居ると、それを訪はんとて來たるところの昆虫が甲乙丙丁と多くの異種の花を見舞ひ従つて自然的に色々な媒助法を行ふて茲に珍奇な種類が出来るのである、之れ等は元より豫定の變咲を得ることは出来ないけれども却つて珍奇な種類を得る場合がある、なせかと云ふと人工媒助法に由つて交雜を行ふ場合には自分の目的とする種類が必ずしも完全に花粉の交雜を行ふて實を結ぶものと限らない、乃ち花粉の大小や性狀は種類に由つて多少異なつて居つて頂度互に交雜に適する種類が遇はな

ければ實を結ぶことは出来ないものであるから人工媒助法は實はその結果を完全に得るのは中々困難である、今日のところでは何れの種類が互に交雑に適するかと云ふことが明らかに分つていない。

此故に多くの種類を交雑して植え込みて昆虫の見舞に任せて自然的に互に適する花粉と雌蕊とが合体する方法を取れば手数を要することが少くて然かも却つて完全な實を得ることが出来るのである。

要するに人工媒助法は尙ほ大に研究す可き點があつて花粉の性状と、それから雌蕊の組織とによつて實を結ぶと否とが別るのであるらしい、然かし花粉さへ健全であつて花粉管の勢力さえ強ければ實を結ぶのであるが、優等の種類は往々雌雄蕊が不完全で従つて花粉なども健全でない場合が多いから之れが結實に困難を來たすのである。

もしも此人工媒助法さへよく研究が積んで完全に行ふことが出来さへすれば意のまゝに珍奇なる種類をも得ることが出来るのであるから將來益々研究を怠つてはならない。

第九話 實生養成法

人工媒助法に次いで珍品佳種を得んとするには實播法によつて實生を養成するに如くものはなく、實播法によつて奇品を得るのは單に薔薇に限らず、すべての草花に於て一般に行ふ方法で廣く變咲を得るの方法として常に行ふところのものである。

こは遺傳の變異と云ふ理に基づくので元來遺傳の原則として「子は親に似るとは云ふておるけれども必ずしもそうでない、親に似ない子は随分いや多く出

百二十
 來るのである、之を人間に例えてみてもそうであつて、茲に十人の兄弟がある
 とせんに十人十色でみな種々な點に於て相異なつておる、子が親に似ると定
 まつておるものならば必ずしもそう云ふことはない筈である、然るにかくも十
 人十色であつて親に似ないもの、出來るのは抑も理由のあることで元來蕃養に
 してもその他の草花にしても乃至は吾々にしても現今現はれておる性状は遠き
 遠き祖先から傳はつて來たもので、その祖先とす可きものは多種多様の性状を
 有するものが相交雜して以て現今に至つたものであるから従つて遠き多くの祖
 先の性状が混合して現今の蕃養に現はれるのであるからである。
 乃はち一粒の種子の中には數千年間自然や人為で淘汰され來つた性状と數多
 の交雜し來つた父母の性状が含まれておるのである、極めて微小なる一粒の種
 子！それが種々複雑極まる性状を含有して居つて境遇に應じてその複雑なる性

百二十一
 狀の或る部分を現出すると云ふのだから培養其他風土に工合に由つて種々に變
 化して珍奇な變咲を出すのに何も不思議はない。
 實生に由つて種々の變咲を得る理は先づざつと右に述べたやうな次第である
 から吾等は能く此理を悟つて種々なる方法に由つて珍奇なものを得ることを心
 掛けねばならぬ、一粒の種子に含まれておる面白き性状を培養の方法に由つて
 引き出すやうにしなければならぬのである、歐米諸國では早くから此理を應用
 して實生から珍奇な種類を得ておる、歐米は蕃養に限らず多くの草花の珍奇の
 種類の多く出るのは全く此理を應用するからである。
 蕃養の實生から珍奇の種類の造り出すのに主として經驗の多いのは以前は獨
 逸であつたが現今では佛國で盛んに行はれて今では獨逸を凌駕し世界中で新奇
 な種類を出すのは現今では佛國に及ぶところはなない。

さて播種法に二様あつて一は採收したる種子を直ちに播くのと、一は一旦採收した種子を貯えて翌春播くのである、此何れの方法に依るをよしとするやと云ふことについては地方の氣候と種類と目的とに由つて定む可きもので右々一得一失はあるが概して直ちに播く法が利益が多いやうである。

此故に今此法に由る播種法を先づ述べて次に春季播きの法に及ぶことにする、蕃薯の實は初季の花の五六月頃に結んだものならば十一月頃降霜の季節になると紅橙色を呈して充分に成熟するものであるからその時分に採收して中の實を採るのである、實を採るには小刀で實を割つて採るか或は實が多分あれば稲鉢か又は乳鉢のやうなものに入れて軽く舂き砕いて水を入れて攪拌すると、外殻は浮ひて種子は沈むから之れを集めて陰乾すること數日の後に播き下すのである。

之れを播き下す前には豫め播き床を造らなければならない、乃は先づ南向きの日當り良き場所を選びて巾も長さも適宜にしてその所の土を深さ三寸位掘つて除き之れを篩に掛けて極めて細かにし此土を用ひて左の配合土を作るのである。

細土三分、 煖炭三分、 細砂三分、 堆肥二分

右の配合土を極めて能く混じて之れを三寸位の深さに入れ込み成る可く膨軟にしてその上に播き下すのである、之れに用ゆる堆肥は元より充分に腐熟して粉末になつたものでなければならぬ、種子を播き下した後はその上に薄く煖炭と細土とを等分に混じたものを振り掛け置くのである、種子を播くにはあまり密に播いてはならぬ少くとも一粒一寸四方位の距離にして播くのである、それから時々乾燥の度を見計らひて水分を施すことも忘れてはならぬ。

かく種々の注意をして置くと翌年三月中旬頃には發芽するから發芽して一、二寸位の大きとなれば之れを移植するので移植する際にも豫め移植地を造り置かねばならぬ、移植地は豫め成る可く東向きの場所を選び、その土を細かに碎きて次のやうな燐炭肥料を土と等分に混するやうにするのである。

智利硝石二分、骨粉二分、堆肥二分、米糠二分、木灰二分

右の配合物を等分の燐炭と混じて燐炭肥料とするのである。

かくて此燐炭肥料と土とを等分に混じたものを畑一面に敷きその深きは五寸位とし一尺五寸毎に淺き溝を掘つて畝を造り、地面を平らかにならして一尺の距離に一本づゝ植え付けるのである、移植の際にはなる可く根を損せぬやうに注意をすることゝそれから能く天候を見計らつて晴天のときなどには移植してはならぬ、然かし天氣續いて曇天少なき際に止むを得ざる場合には午後四時以

後に移植するやうにするがよい。

かやうに移植して置きさへすれば苗木は根深く土中に入り盛んに成長して木性で四季咲の種類のものなどは年内に花を着くるやうになるのであるから能くその花を見立て、珍奇でそして意に協つたものがあつたならば之れをまた他に移して特に充分の手當をして培養するか或は鉢植にするのである、多數の内に必ず多く自己の意に協つたものがあるから、豫め前の方法に由りて圃地を作つて纏めて移植するものもよい、然かし此際には距離を大きくし少くとも二尺四方の正條植にすることを忘れてはならぬ、此距離は元より種類に由つて異にす可きものではあるが何れの種類とても少くも二尺四方位の距離にしなくてはならない、成長の盛なる種類であるとか或は特に枝葉が繁茂する種類であれば尙ほ多くの距離を取つて植えなければならぬ、此距離は從來の方法に比すると

甚だ大であるやうに思はれるが之れは迷はずに必ず之れを守らなければならぬ、之れ植物の生育を助くると同時に花を美大にするの秘訣である、薔薇に限らず何れの草花でも植物でもその生育を盛んにし美大艶麗の花を咲かしむるには狭い距離に植えてはならない、狭き家は吾々人間にも衛生上有害であるやうに植物にも有害である、動物でみると場所が狭ければ他の廣き場所に勝手に移動する力を持つておるけれども植物は植え付けられたる場所より他に移動する力がない。

此故に之れを植え付ける際には豫め充分の地積を興えなければならぬ、さもないと薔薇は決して完全の生育をすることは出来ないものである、植え付ける際に充分の地積を興えて置いてそして燻炭肥料を施すと云ふことがすべて植物を培養する上に於ての秘訣であつて之れ余が近頃各植物について頻りに主唱して

おるところである、稻ならば二倍三倍の收穫を興え大根や芋ならば數倍に生育し、草花ならばその生育を早め開花期を早め美大艶麗の花を開くのである、薔薇に於て此理が通せぬ筈がない、いや余は現に薔薇に於ても經驗を以つておる現に實驗しつゝあるのである、そして非常なる成績を擧げつゝあるのである。

讀者諸君よ薔薇を栽培せられんとしつゝある人々よ、決して此點を軽く見てはならない、薔薇の種類改良變喚培養の秘訣は實に掛つて此點にあるのである、疎植と燻炭肥料の應用之れ忘れてはならぬ點である。

薔薇の實蒔法を行ふに當つて温室を利用すれば元より早く結果を見ることが出来るのである、乃はち秋末に種子を直ちに蒔く時分に畑に蒔かずして鉢に蒔きて温室内に容れ置か或は温室内に蒔き床を造つて蒔くのである、そうすると種子は年内に發芽し冬間頻りに生長し翌年三月頃にもなれば四、五寸の丈

となるもので外氣の溫度が高まつて最早や大丈夫と云ふ時分になつて移植すれば早く花が咲いてその結果を早く見ることが出来る、近來のやうに温室が流行して之れが利用が盛んになつて來ては之れを利用するに越したことはない。かく温室で育てた苗木は幾分か虚弱の傾があるを稱える人もあるが余の経験上少しく注意をすれば別に大した違ひはない、たとひ多少の弱點があるにしてもその成長が非常に促進されて早く結果を見得る點に於て大に利益がある。以上は種子を採收して直ちに蒔く場合のことであるが尙ほ茲に春季になつて播く所謂春播法を行ふ場合のことを少しく述べて置かう。

春季に蒔く種子は秋季採集してから貯ふるものであからその法は實を採收したるとき外殼のまゝに細砂と燐炭と等分に混じたものを盛りたる箱に入れて溫度の變化の少ない所に貯え置くので此際少量の濕氣を與え置くことに注意しなけ

ればならない、かくて翌春三月頃になつたならば前に述べた方法に依り殼を去つて播種するのでその後の取扱方は前記の通りにすればよいのである。

春蒔きにする方法の中で特に注意すべき點は前に述ぶるが如くに殼のまゝで貯ふることにて、もしも殼を去つて種子のみを貯えりと種子は冬季の間に充分に乾涸して播種する際に當つてたとへ水に浸して播いたとて尙ほ發芽が極めて不揃であつて數月間を経ないと云ふやうなことがある、從來殼のまゝで種子を貯藏する方法の人々に知られない以前は春蒔は困難のものとしてせられて居つたのは全く右の理由に依つたものである。

此種子貯藏法を始めて思ひ付いたのはあまり古くないことで之れに由つて實播法が容易に行はるゝやうになつたのは變咲培養上に一段の進歩を來たしたものといふはねばならぬ、尙ほ春蒔にした場合には床場には時々如露で水を注

いでその乾燥を防ぎ或は日光強き際には葎實を以て日蔽をなし日光の直射を防ぎなどの注意をも施さなければならぬ、此注意を怠ると往々幼稚なる苗の枯死を免れないのである。

尙ほ朝顔を始めその他多くの草花のやうに珍奇な變咲は兎角不完全な種子から出る傾がある、然かし不完全な種子は健全のものに比してその發芽が困難であつて特に薔薇のやうな他の草花に比して發芽の困難なものにあつては一層之れが發芽生育に意を用ひなければならぬ、彼の床に燻炭を用ひ或は貯藏に燻炭を利用することは極めて効の多い有利有益なことであつて之れ等は最近に余の考案に成り未だ曾つて世人の試みたことのないことではあるが、その効の偉大驚く可きものゝあるのは余の保證するところであるから讀者は必ず之れを試みられんことを特に忠告する次第である、そんな發芽の困難な種子でも燻炭を

用ひさへすれば全然枯死せる種子でない限りは必らず發芽するのである。

此故に變咲を養成せんとするには成る可く不健全な未熟な種子を撰んで燻炭を用ひて之れを發芽生育さすと云ふことは極めて趣味多きことである。

さて實生の開花期は如何と云ふに木性叢性の四季咲類は不完全ながら發生年内に開花するけれども蔓性其他のものゝ一季咲は數年を経過せないと開花しないものがある、その甚だしきものは十年を経てもなほ開花しないものさへある、然かし之れは従來の燻炭を用ひない場合のことであつて燻炭を用いた場合にはその生育が非常に促進さるゝから何れの種類でも二、三年の内に花を開かぬと云ふことはない、之れがその燻炭の効果の偉大なる點の一つである。

なほ普通の木性のものは従來開花後三年にして始めて本能を發揮するのが常であつたが燻炭を用ひた場合には優にその年内か少くとも二年目には充分にそ

百三十二
の本能を發揮するから能くその性状を見定めて取捨するがよい、この取捨する方法が一つの問題であつて初め左程に見事なものでなくても年を経るに従つてますますその美を増すものがあるし或は又初め見込のあるものと思ふても存外左程にないことがある。

要するに之の將來の見込のあるなしを定めるのは一は經驗に由つて始めてその正しきを得るのであるから各自が自から經驗を積むより外に仕方がない、然かし取捨選擇は各自の嗜好にも由ることであるから自己の嗜好を標準として取捨す可きであるが今實生の變化を來たす點を擧げると

- 一、花形の變化
- 二、千重八重の變化
- 三、花色の變化

- 四、葉の白斑黃斑の變化
- 五、幹に白縞黃縞を生ずるの變化
- 六、咲口に奇癖あるもの
- 七、開花中に色合の變化するもの

等である。
かくて栽培者の意に協なつたものを見出したならば實生速育法なるものを行ふがよい。

之れを行ふには八月中旬頃乃ち夏の土用明きになつて小指大位の砧木を撰んで一方銳刀を以て實生苗木の幹の一部を削り圖に示すやうに縛して所謂呼び接を行ふのである。

(實生速育法) 砧木



圖二第

その花の本性を現はして茲に立派な變咲が得らるゝのである。

かやうに實生から得た變咲もその後の培養に由つて良くも悪くもなるから大にその點を考へて充分の手當をしなければならぬ、その方法としては色々あ

かくして置くと實生苗木自身の成長力と、それから強壯な砧木の助勢とに由つてその生育が促進せられ、翌春にもなる強壯なる接穂を得らるゝまでになるから、此接穂を接したものは大に

るけれども肥料を適宜に施すこと、水分を適宜に與へること、冬季温度の關係に注意することなどは極めて重要なことである。

第十話 蓄蓄接木法

接木法は變咲養成には重要な技術であつて人工媒助法や或は實播法に由つて珍奇な種類を得た場合に之れを繁殖すに必要なるは勿論のこと接木法自身がまたその變性を促して之れに依つても變咲を得ることが出来る、特に蓄蓄は他のものに比して比較的活着が容易であるから此法を應用する場合が多い今此接木法に由つて植物に如何なる變化を來たすかの一般を示すと、

- 一、接木法は蓄蓄の開花期を早める。
- 二、接木法は稀有の奇品良種を蓄蓄増加すに最も適當である。

- 三、接木法は老木の勢力を恢復さす。
 - 四、接木法は矮性のものをして強盛な生育を遂げさす。
 - 五、接木法は強健で徒長す可き木を矮性にする。
 - 六、接木法は晩生種を早生にしたり早生種を晩性にしたりする。
 - 七、接木法は花の變化を來たす。
- 右は接木法に由つて起る變化の主要を示したものであるが蕃薇などでは之れが性質を改良變化さしたり若くは繁殖さしたりする上に於て必要欠ぐ可からざるもので此術に熟達すると否とは栽培上に利害損益を及ぼすことが大であるから大に研究す可き事項であると云はねばならぬ。
- さて蕃薇の接木をするには何れの時期が良きやと云ふに、こは十一、十二、月の三ヶ月を除くの外は年中行ふことが出来るのであるが然かし普通一般

- に行ふて適當なる時期は次のやうである。
- 一、春接と稱えて二月十日頃から三月上旬頃まで。
 - 二、夏接と稱えて六月十日頃から同下旬頃までの入梅初期。
 - 三、秋接と稱えて八月十日頃より九月下旬まで。
- 右の三季が最も適當の好時期ではあるが、その中で春接は氣候が少しく寒冷に過ぎてその手入れが六ヶ敷いから夏接、秋接を行ふのが安全である。
- そこで接木を行ふには砧木と接穂とを吟味をすることが極めて肝要であるが今茲に少しく砧木と接穂との接着する理を説明せねばならぬ。
- 元來接木の相接着癒合する所以のものは常に樹幹内の木皮と心材との間にあ
- る軟薄なる發生層若くは「カムビヤム」層と稱する部分の癒合するものであ
- つて利刀に由つて巧みに切斷面を平滑ならしめても發生層にして相接合するこ

とをしなければ到底活着するものではないのである、春季すでに樹木が發芽し、生育の強盛な六七月頃に樹木を切斷して皮肉の相分離するところは乃はち發生層若くは「カムビヤム」層と稱するもの、存在するところであつて、どんな大木でも微細なる嫩莖でも年々其大きさを増大する草樹にあつては此層を存せないものはない。

此故に接木法を行ふてよくその効を奏せんとならば須らく接着の基礎である發生層乃はち通俗に「アマカワ」と稱する部分の位置及びその作用を能く知らなければならぬ、蓋し發生層は細胞膜極めて薄く細胞また小にして規則正しく配列するを常とし葉及び根から吸収したる養分の多くは此層を通過して必要なる部分に輸送するものであるから木質内の他の部に比して極めて貴重なる部分に屬するのである。

さて蕃薇の砧木としては一般に野蕃薇を用ゆるのであるが貴重品になると長春蕃薇を用ゆるのである、其他「ゴヤ」「ハトヤ」とか或は強壯なる蔓性や叢性蕃薇の種類ならば何んでも用ゆるに差支へがない中にも旭の港、五大洲、紫玉などの種類を用ゆることが多い。

關西地方の花戸では毎年右の種類の發育良好なる枝條を四五寸の長さに切りてその數萬本を挿枝として仕立て、置いて出根後三四年を経過したものを必要に応じて砧木に用ゆるやうにしておる、之れで良好な苗木を養成することが出来る。

砧木の大きさの最も適當なるものは小指大のものであつて侏儒蕃薇の砧木などは直徑二分から二分五厘位のものが良いやうである、砧木のあまり大に過ぎるものは結果がよくない、出来ることなら差支へのない限りは成る可く細かいも

のを用ゆるのが良いので、さすれば接穂の肉は砧木を包むことが早くて接穂と砧木と年々同大に發育するから一寸見たところでは接穂と砧木との區別が見分け難くて良苗を得らるゝのである。

それから尙ほ茲に注意す可きは元來接木は勢力の強盛なる根幹と纖弱なる軟枝とを接着せしむるのであつてその取組み極めて不釣合のものであるから、施術者は宜しく相互の調和權衡を取することに注意しなければならぬ、その調和は如何にして計るやと云ふには砧木の根株を檢してその根が多きに過ぎるときには適宜に之れを切り棄てることである、乃ほちその根を大概見計らつて適當と思ふ位に切り縮めるのである、かくてその根の切り方宜しきを得れば砧木と接穂とが平均を得て新芽は盛んに勢ひ良く發育して茲に上等の苗を得ることが出来るのである。

もし右に反して過大の砧木を用ゆるか或は砧木の勢力強盛に過ぐるときは纖弱なる接穂は俄かに強盛の資養を受くるに堪えずして却つて萎縮すると云ふやうなことがある、何んでもすべて平均を得ると云ふことが肝要であるから此點に大に注意を要するのである、然かし一時に多數の接木をするに際して一々かかる手数を掛けることが出来ない場合にはその砧木の近傍に溝を掘つて鐵で根の一部を切つてそこに細砂を埋め置くことよい、さすれば大に勢力を殺ぐことが出来る。

次に接穂の撰定であるが春接に用ゆる穂は前年の秋季の新枝を用ゆるが宜しく夏接や秋接にはその前季の何れも充分發育せる生氣盛んなものを選ぶのがよい、前秋の枝は充分成熟しておるから宜しけれども夏接や秋接の際に用ゆるものは成る可く成熟しておるものを選んで用ひなければならぬ、また接穂は二

た芽掛を用ゆるのを通常とする。

さて接木の方法としては種々あれども先づ苗に普通に行ひ且つ最も適する方法を次に順を追ふて述べることにする。

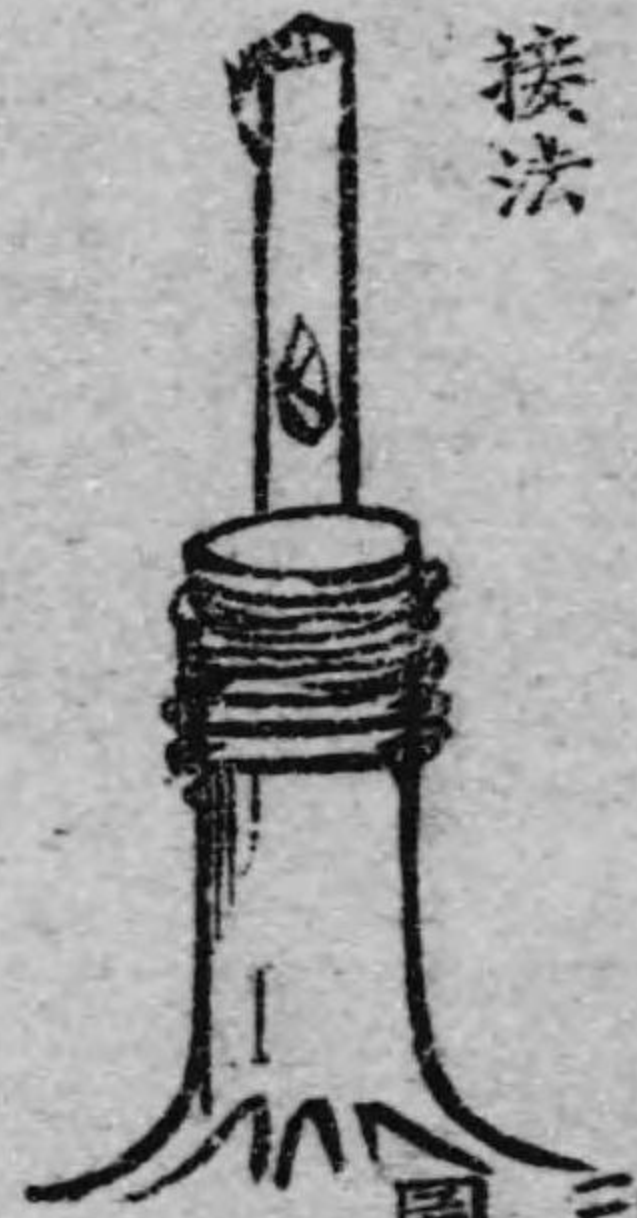
(一) 切接法

此法は最も普通に行はれ且つ最も適當なる方法にして先づ撰びたる砧木の根際から一二寸上がった所を齒の細かな鋸にて切斷しその斷面を鋭き小刀で平らに削り次に鋭刀を以つて皮膚と木質部との中間を七八分切り下げるのである、之れが乃は熟練を要する手際もので、深からず淺からず平らかに切り下げるやうにしなければならぬ、此部分は前に述べた形成層と稱する部分で砧木と接穂とは此部で互に活着するので、その細胞は極めて生活力に富み且つその附着力が甚だ旺盛であるのである。

接穂



切接法



第三圖

つた部分とが互に能く密着するやうにするのでかくして相互の形成層の部分がピッタリと接着しなければ如何に手際よくするもその効がないからこの點に重きを置かねばならぬ。

かやうに互に密着させて後養にて能く縛し置くのである、その縛するのには

次に接穂はやはり鋭利なる小刀を

以つて二芽を残して切るので下方は

砧木に接着せしむべき部分である

から下芽を去ること下方一分位のと

ころから手際よく削つて其下端をも

少しく断ち切るやうにするので要は

砧木の削つた形成層の部と接穂の削

蕃養は他の樹木よりも生育が強盛であるからあまり緊く縛してはならない、幾らか緩く縛するの必要とする。

(二) 挿接法

此法は砧木や接穂の撰び方はすべて切接法と同様でまた接穂の切り方も變りはないが只其異なるところは砧木に刀の入れ方を圖に示すやうにし竹篋を以て木質部から皮を剥がれその所に接穂を挿し入れて皮を被せて葉にて巻けばそれでよいので、その方法が簡單であつて従つて初心の者には適當な方法であるばかりでなく、その活着の歩合も割合に多い、この砧木に刀を入れる幅は接穂の大きと同じ寸法にし、やはりしつくりと合はすやうにしなければならぬ。

(三) 皮接法

此法は主として米國で行ふ方法で砧木の皮の剥げ易き時期を見計らつて行ふ

挿接法

皮接法



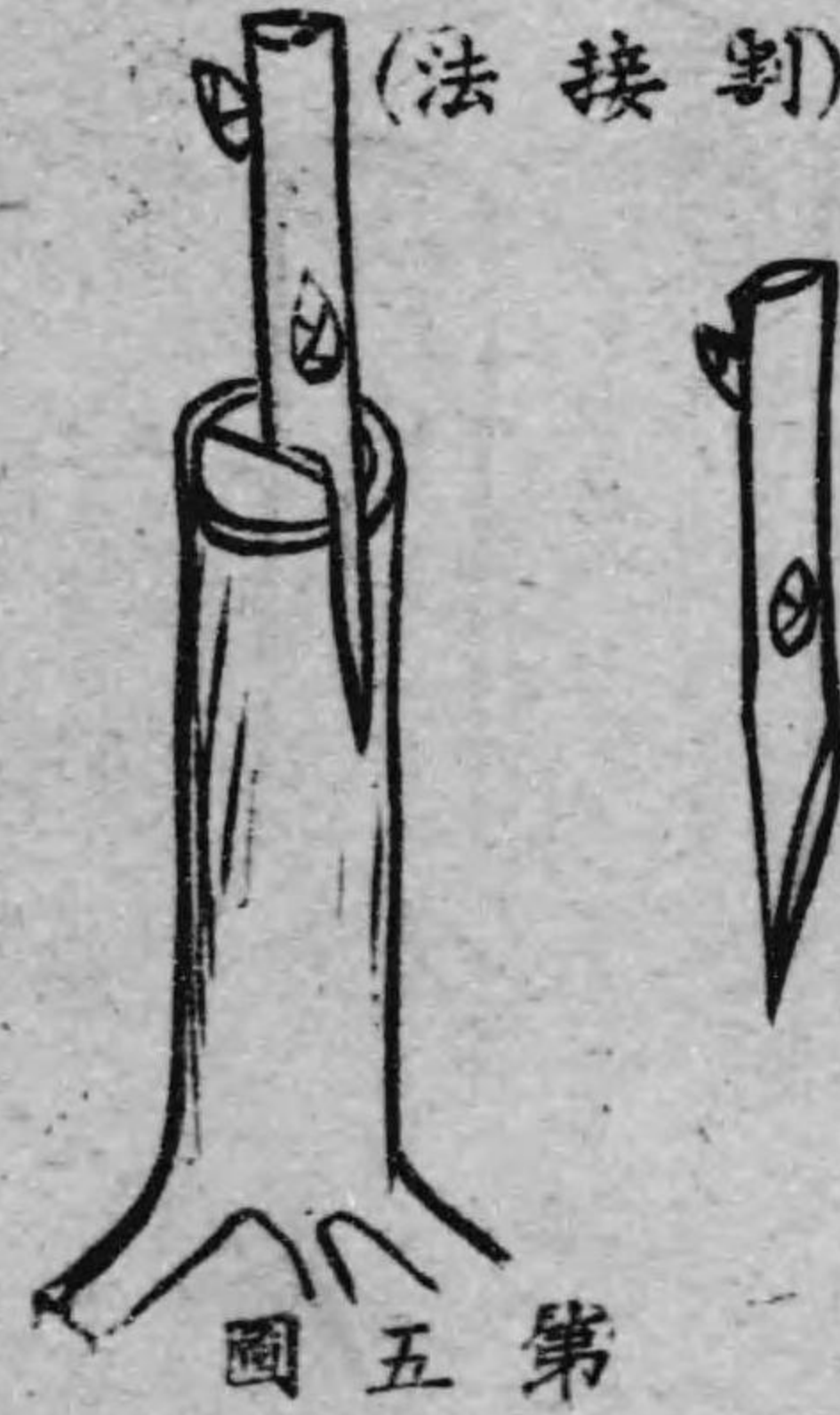
圖四第

のでその法先づ砧木を適宜の所から切りて断面を平滑に削るなどは他の法と異なることではないが、その異なるところは切口より下方へ凡そ一寸程堅に皮を截り下げ「ナイフ」の先で剥ぐこと圖の如くにし前法と同様に削つたる接穂を挿し入れ葉にて巻くのである。

此法は砧木の膨脹する勢力のために接穂を押し出されて屢々失敗に終ることがあると云ふ説があるけれども必ずしもそうでない、乃ちちかゝる患のある際には砧木の根を切り去つて適宜にその勢力を殺ぐ方法を採ればよいのである。

(四) 割接法

此法は先づ砧木を適宜の所より切りてその断面を平滑に均らし、大形の接木「ナイフ」を以つて砧木の中心を堅に一寸程割き次に接穂の下部を圖に示すやうに楔形に切り下げ之れを砧木の割き口に挿し入れ接穂の外面と砧木の外面とを平らにして藁を巻き付けて外氣の浸入を防ぐやうにするのである。



かく接穂の外面と砧木の外面とを平らにすることは、その相互の形成層を能く密着せしむるのに極めて必要なことで之れを同位置にして置かなければ活着しないことは前に述べた通りで

ある。

以上は蓋被に主として行はるゝ接木法であるが、かかる方法に由りて接木したるものは普通豫め用意せる畦溝中に植え穂の見えざるまでに高く土を盛り地上に發芽すること二三寸にして被土を去り接合部を露出せしむるのである、けれども接木の數が少なく且つ丁寧に取扱はんとしたならば被土の代りに植木鉢を被ひ上部の小孔を小石のやうなものにて閉ぢ光線や空氣の流通を防ぎ、發芽するに従つて植木鉢を少しづつ傾けて順次に光線を受けさすやうにするがよい、これ軟弱なる嫩芽を急に光線を受けさすと水分の蒸發が著しくて、ために直ちに枯死するに至るからである。

尙ほ接木の接着期間に就いて述べてみると夏接秋接は氣候の工合に由つて多少の遅速はあるが大抵植込みの日から十日以上二週間以内に發芽し初むるのが

通例である、もしも二週間以上三週間餘になつても一向發芽する模様のないものは到底見込みのないものと見て差支へがない。

第十一話 薔薇芽接法

芽接法はなほ接枝術のやうに植物を繁殖せしむる一種の手術で兼ねて變性を促がすこと頂度接枝術と同じやうな關係がある、然かし之れを行ふ時期と方法とに差があるから特に茲に別に述べる次第である。

芽接法は他の繁殖法特に接木法に比して施術が容易であるばかりでなく全く時期が異なり至極簡易有効なる一種の方法であつて今接木法に比して利益のある點を擧げてみると次のやうである。

一、芽接法は一度其手術を誤るも第二回目若くは三回目の手術を施すを得る

も接木法はかゝることが出来ない。

二、接穂が少なくて貴重なる場合には一芽づゝ接着せしむることが出来るがら多數の砧木に接芽せしむることが出来る、接木術に於ては一芽づゝ接着せしむることが出来ないことは、普通二芽以上をこゆるのが常である。

三、春季接木法を誤り活着せすして砧木から發芽したるものには其年内に芽接法を施すことが出来る。

四、一旦手術を誤つても砧木を衰弱せしむるの憂がない、蓋し幼莖中一小部分の皮に負傷せしむるのみであるから、爾後癒着することが頗る容易である。

五、芽接法は活着後接合部の癒着が宜しく一二年で砧木との接合部を見出

すことが出来ぬ位になるの外風其他の妨害物に由つて接合部を折傷さる
いことが少ない。

六、手術が容易であるから従つて時を要することが少なく暫時に多数の砧木
に接着せしむることを得るの利益がある。

さて芽接法を行ふ時季は七月中、下旬頃から八月中旬頃迄であつて、翌年發
生す可き腋芽が固定した際を撰むのがよろしく早きに過ぎれば一旦接着したも
のも養液の循環が迅速で強盛なるがために出せられて活着を誤ることが
ある、また遅きに過ぎると施肥を行ふ後に樹液の循環が遅緩となつて充分
に接芽を固着せしめ得ざるの不利がある。

砧木は二、三年生のものを撰ぶのが宜しくあまり年を経たるものは良くない、
それから芽接法に用ゆ可き芽は當春に發生した枝梢中で勢力が強盛で固定した

るものを撰みてその中央部に存する芽を探るのがよい、元芽や先芽は共に勢力
が弱くて活着することが少ないものであるから成る可く用ひないがよい、然
かし已むを得ない場合には寧ろ微小であつても元芽を撰ぶのがよい、先芽はそ
の組織が粗糙で従つて水分の蒸發が著しく乾固し易いものであるから宜しく
ない。

然かし不完全なる種子や未熟なる種子が多くの場合に變性を來たすやうに元
芽や先芽も變性を來たすことがあるから變性を養成する場合には特にかゝるも
のを撰ぶことがある。

それから砧木の接部は北向きにして節のない平滑な部分を選んで剝皮したる
内に接芽を挿入するもので節部は剝皮が容易でないばかりでなく手術を巧なら
しむことが出来ないから活着することが少ない。

百五十二
砧木の皮を剥くには角筒か又は竹筒のやうなものを用ひて皮肉間をして爛せしめないやうに取扱はねばならない。

尙ほ手術を施す時間は何時がよいかと云ふに、朝夕か若くは曇天で風のなき日を撰む可く、其他の時は水分の蒸發が著しくして活着することが困難である。

芽接法に依つて接着せしめたもの、活着せしや否やを知らんとするには芽接後一週日を経て葉柄に軽く手を觸れて容易に墜落するときは活着した證で乾固して固定せしものは不活着の證である。

さて芽接法を述べんに接穂を撰みたる後接芽を削り取るには先づ葉面の基部を僅かに残して葉柄に附着せしめ其他の部分に切斷除去し、接穂に葉柄及び葉面の一部のみを附着したるものを水を充せる桶の如きものに挿し置き砧木の

(法接芽)



圖六第

在る場所に立つて芽を削る法を行ふのである、之れをなすには鋭利なる小刀及び象牙若くは牛馬の爪から製せる筒の類を用意すべし最も完全なるものは豫め鋭利なる小刀の柄を筒形に製作し置くを可とし、現に芽接用小刀として園藝家の間に使用せらるゝものは斯る小刀を云ふのである(すでに小刀を準備し將に芽接法を行はんとするに臨みては接穂に存在する芽の上部若くは下部を去る五分内外の處に横に切目を入れ皮部及び發生層の部

分を切斷し、更らに之れと相上下反對する部分から削り取るを法とするのである。

百五十四

此際には成る可く薄く削り取るのを利益とすれども、さりとて徒らに薄きを貴んで僅かに皮部を削る位では活着せしむることが困難である、また深きに過ぎると木質部に切り込んで反つて活着を誤るに至るからして發生層の部分より、切削するか或はやゝ之れよりも深く切削するやうに小刀を使用するのがよい、分り易く云えば芽の上若くは下を横に切つて更らに上若くは下部から薄く皮と共に接芽の葉柄と葉芽を削ぎ取るのである。

かく接芽を削り取つた後は直ちに口部に挟んで砧木を活着せしむべき部分を十字形丁字形若くはその他の適當なる方法に従ひて負傷剥皮せしめて其皮部の内に削つた芽を挿し入れて巻縛するのである、此際に削つた芽を口中に含む

所以のものは砧木を剥皮するに當つて双手を使用するの必要があると共に薄弱にして乾燥し易い削芽をして多少たりとも水分を發散せしめないやうにすることを務むるに由るものであるから、必らず此法を採らなければならぬ。

すでに砧木を剥皮したる後に前の芽を挿入れたならば直ちに剥皮で左右から接芽を被ひて打葉の類にて芽の上下を巻縛するのである、而して活着した後とても其年内は解縛することなきやうに注意すべしもし然らずして活着したのを見て直ちに巻縛せるものを解き去るやうなことがあれば、漸く活着した砧木の皮部は樹液の循環や若くは他の作用に由つて分離して一旦活着した接芽も爲めに枯死して翌春發芽生育しないやうになることがあるから翌春になつて自然に腐敗解縛するまでそのまゝと爲し置かなければならない。

余が會て九月上旬に芽接法を行ひて活着したのを認識して直ちに巻縛を

百五十五

解いたのに尙ほ樹液の循環が止まなかつたがために一旦密着した皮部が分離してために多數の接芽を枯死させたことがあるから、此點に大に注意しなければならぬ。

芽接法には各種の方法あれども主として砧木の剝皮法を異にし従つて相應するやうに接芽を削切するのみにして最も普通に應用せらるゝものは丁字形芽接法である。

丁字形芽接法は新枝の平滑なる皮をその名の示す如くに丁字形に負傷せしめ竹筥若くは角筥にて周圍の皮を開發せしめ、其内に接芽を挿し入れ打葉類にて卷縛するものである、而して之れに應ずべき接芽は芽の下部を横に切るも上部を切るも利害得失に差異がないやうではあるが通常は下部を損傷せしめて上部から削り取るのを常とする、丁字形の切り方は接芽の大小に由つて負傷部の廣

狭を定むべきもので接芽の大きさよりも多少挿入す可き剝皮部を大きくしないこと容易に箱挿せしむるを得ないばかりでなく、稍もすれば削切部を碎細せしめ易く従つて活着に困難を生ぜしむるに至るものである。

また丁字形の反對に上形に負傷剝皮する方法もあるがその手術の難易や活着の歩合は殆んど同一であるから接着せしむべき位置に由つて上形若くは丁字形を撰む可きものである。

それからまた十字形芽接法と云ふがある、これは丁字形及び上形芽接法と同一な手術を應用するもので、活着の難易も又殆んど同一であるけれども主として砧木の割合に接芽の大きさで丁字形若くは上形芽接法に由つて接着挿入せしめ得ない場合に行ふのが常である、之れを行ふには文字の示すやうに切るのてあるがその交叉點の上部には短傷を負はしめ下部は長傷を負はしむるやうに

心懸けねばならない。

右の外環状芽接法、方形芽接法などがあるが、なほ剝皮芽接法と云ふがある、此三法の中で前の二法はあまり行はない方法であつて、活着の歩合も少ないのであるが、剝皮芽接法については少しく説明せねばならぬ。

剝皮芽接法とは砧木の皮に上部より淺く削り目を入れ下底を其まゝに残し接芽を之れと同様に削つて符挿し負傷剝皮せしめた砧木の皮を被ふて下部より巻縛するものである、此法に由ると手術が多少粗なのを免かれなけれども、丁字形若くは上形芽接法を行ふよりも手術が容易であると共に同一時間内に多數の苗木を接芽し得るの利益がある。

右に述べるが如くに接芽法は手術頗る容易で活着すること多く接穂を要することが少なく一時に多數の砧木を接換せしむるを得ると云ふやうな利益があるから將來ますます此方を行ふがよい。

あるから將來ますます此方を行ふがよい。

第十二話 蕃薇の挿木法と分條法

挿木法は變候養成上極めて必要なる方法にして主として貴重なる種類を養成繁殖する場合に行はるゝことがある、元來蕃薇は他の植物に比して極めて活着し易きものにて單にその枝條ばかりでなく葉でさへもその方法さへ適當なれば活着生育することが出来るのである、特に我邦のやうな氣候の溫和なところでは四季を通じて之れを行ふことさへ出来る、然かし夏季のみは手入が六ヶ敷従つてその効果も面白くないから先づ

秋九月初旬から翌年三月上旬頃までを好時季とし別けて十二月から翌年二月上旬頃までが最良の時季である。

然かしこは主として關東地方、東京附近を標準としたもので、奥羽や北海道地方の寒氣強きところでは、元よりその時季を多少異にせねばならないのである。

元來挿木を行ふに際して注意すべきは播種の際と同じく温熱と濕氣と空氣との三者を必要とするもので之の三者が適度でないとは活することなきものである、乃はち種子が温熱と濕氣と空氣とに由つてその發芽を促がされる如くに挿木も此三者に由つて發根を促がされて始めて活着するのである。

此故に挿木法を行ふに當つては適宜に之れ等の温熱と濕氣と空氣とを與えるが必要なので従つて之れ等を適當に與えるために特に設けたる床が必要なのである。

その床を造るには先づ日當り良き塙所を撰びて北方は高く南方は低き壁枠を

構えてその上部には硝子戸を掛くる装置を爲してその内部には

細土三分 細砂三分 燻炭四分

の配合土を入れて適宜に緩やかに踏み堅め置くのでその土の深さは一尺位にし置かねばならぬ。

かくて秋枝のよく成熟したるものを長さ凡そ五寸程に切り下端は最下の芽から上端は適宜のところから鋭き刀を以て斜に削り切りて之れをその床に挿し込むのでその際には枝の三分の二は地下に三分の上を地上に顯はすやうにして二寸位の距離に挿し込むのがよい、そうすると翌年二月下旬にもなると下端の切口の所へ充分肉が揚がるから更らに之れを肥料を施せる床へ移植するので、その際に用ゆる床土は

畑土四分 細砂三分 燻炭三分

の配合土と

堆肥	三分	木灰	二分	智利硝石	二分
骨粉	二分	米糠	一分		

の配合肥料とを等分に混じたものを用ゆるのを最も良しとする。

乃ち此床土はその深さを少くも一尺五寸位として二尺巾の畦を造つてそれに一尺の距離に移植しその際軽く土を踏んで置くのである、此移植の時季が遅くれると日射の強さがために往々凋落すると云ふ恐れがあるから成る可く春季早く行はねばならない。

かくして置くと追々に根を下ろして来て五月初旬にもなると小さき一、二輪の花を附くる位になるものである。

また春季二、三月頃から四、五月頃までに挿木法を行ふ場合にはなる可く清

涼の場所を選んで苗床を作るのがよろしく中夏の際には適宜日蔽ひをなし、また時々灌水をなすことを忘れてはならぬ、その床土などは以前のご同じくして能く注意を怠らずば、秋彼岸前後にもなると移植するに適當となる。

尚ほ秋季九月上旬から十月中旬までに行ふ場合には日當りの良き場所を撰んで苗地の周圍に高さ二尺位の圍ひを設けて日中は霞簑を掛けて日光の直射と風の吹通しを防ぐの方法を取り、かくて晩秋になつて降霜の時期になつたならば葎か茅の類にて霜除けの方法を取るなどの手當をしなければならぬ、かやうに色々注意をして翌春彼岸前後になつて移植をするので、その際に用ゆる床土や方法は前の方法と同じてよろしい。

それから茲に一つ注意をして置くことは春秋の二季に行ふ挿木は冬期とは違つてその活着せるや否やを試みるために之れを地より引き抜いて見ることは

堅く禁じなければならぬことである、もしも一度抜き取るやうなことがあれば、たとひ挿木の下部に肉が上つて白く繊維を発生したものでも再び活着することがないものである、往々初心の人々は之れを引き抜いて見たがるものであるが、かくては折角の苦心が水の泡となる恐があるから此點はよく注意をしなければならぬ。

それから何れの場合にも移植には必ず二尺の畦巾に一尺の距離に植えなければならぬ、時としては種類によつては尙少し多くの距離を與ふるがよい位である、之れは人に由つてはその距離が多きに過ぎるやうに思ふ人があるかも知れないけれども前の話に述べた疎植の利益必要と云ふことを能く悟つて必らず此位の距離を取つて植えるのがよいのである。

以上は元より露地に挿木を行ふ場合であるが、温室内で行えば元より時季を

撰ばず行ふことが出来るばかりでなくその活着や生育が極めて早く思ひのまゝに行ふことが出来るのである、貴重なる種類を挿木する場合などには温室を利用するに限るのである。

また蓋は單にその枝ばかりでなく、嫩葉とても之れを挿して活着生育せしめ得るものであつて、此際には嫩葉をば葉の莖根から芽を存して摘み取るがい、かくて之れを前に挙げたやうな床土に植え込んで適宜の温度と濕氣を與えて怠らなければやがて莖根に肉を上げて繊維を生じて小芽を發するに至るものである。

尙ほ挿木法について注意すべき點を挙げると次のやうである。

一、挿穂を切斷するには天氣工合に注意しなければならない、雨中や又は降雨後兩三日以内に挿穂を切斷するときは多量の水分を吸收するがために

切斷後水分の蒸發が著しく遂に枯死するの患がある、晴天の日に切斷するときは穂内に包含する水分が少ないために杆挿後土中より水分を吸収することが多く朝は多量の水分を含んで降雨後に切斷すると同様の損害を受け易ひ、此故に晴天の日中か又は風の吹く際に切斷するのが最も好時期である。

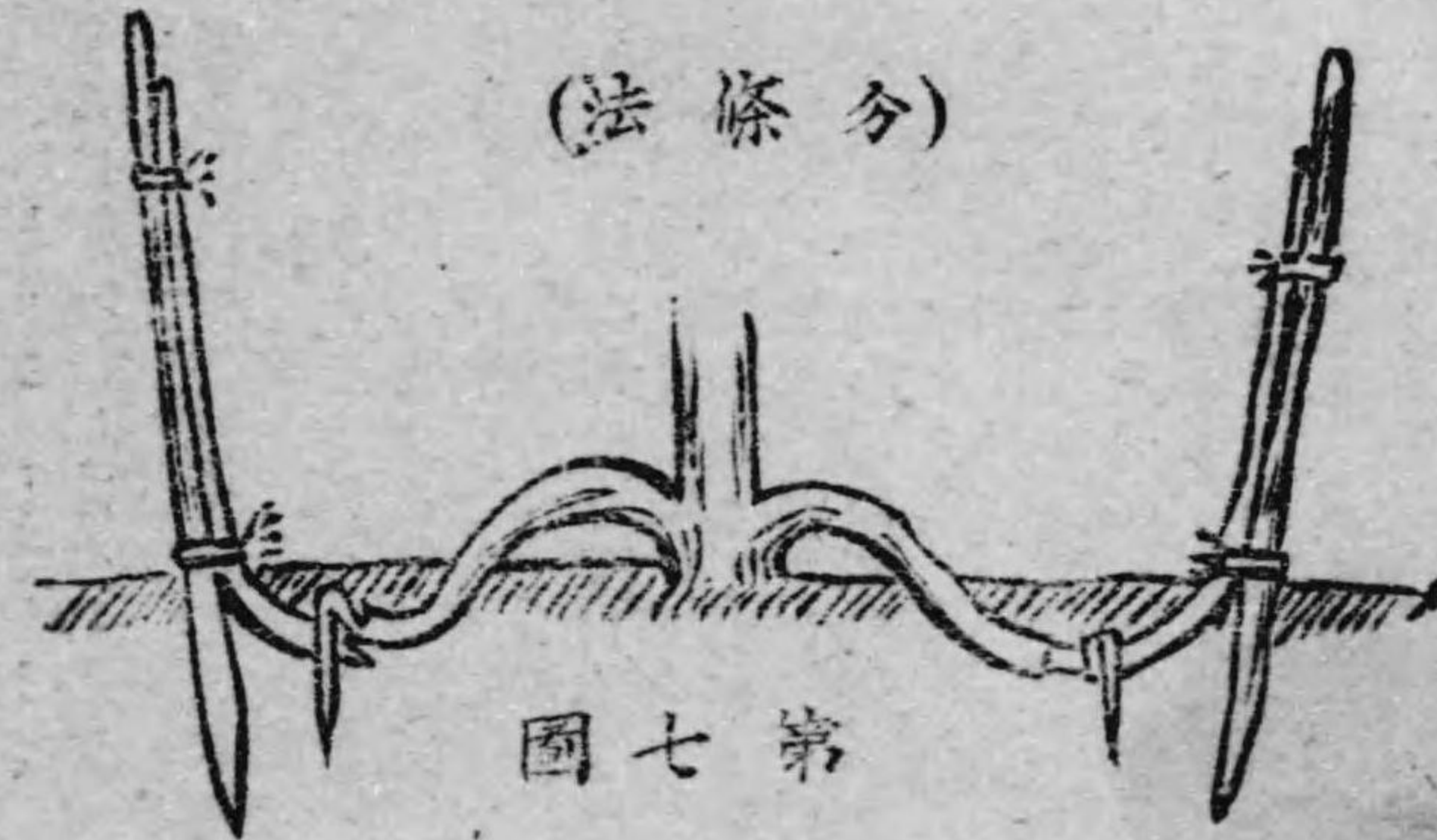
- 二、床に挿し込む深さは五寸位の丈けのものならば三寸位にするを適度とし深きに過ぐるも淺きに失するも活着することが少ない。
- 三、切斷するには成る可く其負傷面を廣くして發生層をして多く土地に接せしむるやうな必要があるから、その末端を斜に切るやうにするがよい。
- 五、古株は挿穂に用ひてはならない、之れ生活作用が衰えて伸長發育することが弱くして従つて活着することが少ないからである。

要するに挿木法は水分の發散と季節とそれから挿穂の撰擇に注意して挿穂をして速かに發根生育するやうに勉めなければならぬ。
次に分條法のことについて述べやう、之れも挿木法のやうに變換養成上繁殖の第一法として行はるゝもので四季を通じて行はるゝものではあるが、その中でも初春二月中旬から四月上旬までと初夏六月上旬から七月上旬までと初秋八月中旬から十月中旬までが最も適當の季節である。

その法先づ母樹の周圍に

細土四分 細砂三分 燻炭三分

の混合土を七、八寸の厚さに置き春行ふ場合には前年の秋枝を用ひ、夏及び秋に行ふ場合には當年の春枝の良く成熟したる枝を撰びて圖に示すやうに撓め下ろして前の配合土中に導びき木柱又は竹棒の類を立て、之れに縛し置くのであ



百六十八
 る、而して其土壤に没す可き部分は悉く葉を去つてその枝の中途には鋭刀にして少しく傷けて土を被ひ置くのである、そしてその土の上には蓆か又は俵の類を被せて土地の乾燥を防ぎ置くがよい。
 そうすると地下の傷口からだんく肉を上げて根を生ずるやうになるもので春夏の際に行なつたものは翌春の彼岸に秋行ひし分は翌年の秋の彼岸になつて何れも母樹より切り取りて分け植えることが出来る、此法に由れば母樹の能く繁殖せ

るものなれば同時に數十本の苗を得ることが出来る。

尚ほ分條法に似て簡單なる繁殖法がある、それは母樹の幹でも枝でも己れの欲する場所に幾ヶ所となく切口を作つてそこに一掬の水苔を附けて麻又は小繩で縛つて灌水に注意して乾燥を防ぎ置くと自然と白き纖維が現はれて来るからその際母樹から切り離して他に植え込むのである、また水苔の内部に細砂と燐炭とを等分に混じつたものを少しく入れ置くと至極妙である、それから此法を温室内で行へば四季を問はず極めて早く目的を達することが出来るのである。

以上述べた繁殖法の外にまた分栽法をも行ふことがある、こは木性の種類では行ひ難いけれども叢性類などには適當の方法であつてその母樹の繁茂の度合を考へてその株根を適宜に切つて氣條毎に根を分割し、小刀で切口を削つてそして根際から五六寸位に切り詰めて植え込み置くのである、此法も時としては

往々行はるゝ方法の一である。

第十三話 薔薇の移植法

薔薇は變咲を養成する場合は勿論のこと普通の場合とても種々なる必要に迫られて移植を行ふことが少くない、況んや薔薇の特性として一所の土地には極めて厭き易く若しも永く同一の場所に植えて置くと根幹は次第に衰へて遂に枯死を免かれないのである、その理由はどうであるかと云ふことは未だ不明であつて大に研究を要する問題である、兎に角永く同一の場所には生育しないと云ふのは事實である、現に米國の如きでも沃地では三、四年間瘠地では隔年毎に必らず之れを掘り抜いてその根と枝とを切り詰めて移植するのが常である、また白耳義にても八年毎には必ず地を替えて移植するの習慣がある。

我邦にても薔薇園が八年にして大にその衰徴を現はし十五年の後には全く跡を止めないやうに萎靡凋落してしまつた例がある現に余の知る薔薇園にては僅か五ヶ年にしてすでに衰徴を現はしておるのである。

要するに現今の栽培法に依つては何にか移植せずともその衰徴を來たさないやうの方法、新たに發見せられざる限りは少くとも數年間に一度は移植を要するの事實である、特に珍奇な變咲を得んとする場合とか或はその變咲の本能を益々發輝せしめんとかすると云ふ場合に移植を度々行はなければならぬのである従つて薔薇の移植法と云ふことは重要な問題となるのである、その移植法の如何は直ちに薔薇の培養上に影響を及ぼすのであるから決して之れを軽く見てはならない。

さて移植するについて考えねばならぬ根本の問題は如何にして植物を少しも

百七十二
 痛めずに云替えれば出来得る限り植物自身に移植の苦痛を感ぜしめないやうにするかである、然かし全然その苦痛を感ぜしめないやうにすることは不可能であるから、要は成る可く移植後その勢力を衰へしめないやうにすることである。

移植を行ふには先づ時期を撰ばなければならない、さてその時期は一般に云ふと。

春三月初旬から彼岸まで

秋彼岸から十月下旬まで

の二期が最も良時期と云はねばならぬ、そして移植する爲めに掘り取るには成る可く根を損せないやうにすることが肝要であることは到底望むことが出来ないうことで多少は根の損するのは免かれ難いことであるから大概考えてその根の

損じた割合に應じて根の損傷と成る可く平均を得るやうな工合に枝や葉を切り縮めたり除き去ることである、乃ち要は根の水分吸収作用と葉の發散作用との平均を得るやうに勉めることである、もしも移植の際に根の損じたのにかまわずに枝葉をそのままにして置くときは水分は枝葉からすんく發散するに拘はらず根の水分吸収力が之れに伴はずして平均を失なふがために終に枯死するやうになる。

而してその根の損傷と枝葉との平均を得るには如何にしてその程度を定む可きやと云ふに、これは極めて困難な問題であつて時と場合に應じて斟酌す可きものであるから大体から云えば經驗と熟練とに待つより外に仕方がない、然かしたとひ枝葉は幾らか剪除し過ぎても差支へがないのであるから事がしよいのである。

此故に移植の際には必ず無益と思ふ枝葉を悉く除き去ることを考えればそれで差支がない、之れは薔薇に限らずすべて樹木や草花を移植する際にはみに行なう可き方法である、それから移植せんとて薔薇を掘り取る際には成る可く風と日光に曝らさないやうに注意し成る可く早く移植地に植え込むやうにしなければならぬ、もし小根に損傷を生じたときには缺にて其部分を切り去るがよい。

かくて移植の場所には豫め木の大小に應じて適宜に穴を掘りその中に少しく水分を入れ其上に、

堆肥三分 細土三分 燻炭四分

の配合土を入れて其中に植え込むのがよい、此燻炭は必ず用いなければならぬ、そしてすでに植え込んだ後はそうつと土を押し付けて決して土を堅く壓

し付けて置いてはならぬ。

それから鉢植にするのもまた移植法の一つであつて、やはり普通の移植の場合のやうに適宜に枝葉を切り去つて直ちに鉢に植え込むのである、此際には堅根を成るべく短く横根を成る可く長くする心持に切りて植え込むがよい、そして鉢植の際にはその底の穴の周囲には瀬戸の破片を入れ置きて左の配合土を用ゆるよい。

細土四分 細砂三分 燻炭三分

之れを能く混合したものを用ひて之れに植え込むとその結果は極めて良好である。

すべて草花其他の植物を鉢植にして生育を全ふして開花せしめとんするには土焼鉢を使用すべきもので其他の組織緻密にして空氣の流通温度の透通の宜し

百七十六
 くない鉢を使用すると充分なる生育を遂げることが出来ない此故に鉢内に植物を培養せんとする場合には先づ土焼鉢に栽植して賞観し得るやうになつて他の善良美麗な鉢に植え換えるか若くは土焼鉢を入れるに足るやうな他の鉢と相重ねて賞観用に供するがよい。

植物を鉢に植え込んで指頭にて鉢内の土壤を鎮壓する際には根元を去り鉢の周囲に近き場所を両手六指にて強く壓して根の位置を固定せしむ可し決して全面を壓迫してはならない、之れ根元を堅く壓せば土壤硬固に過ぎて根の伸長生育を妨ぐることが多いからである、特に濕土を壓するのは最も忌むところであつて常に栽植用に供する土壤は豫め土篩のやうなもので篩ひ分けたる細かなものを用ゆるがよいのである。

また甲の鉢から乙の鉢に移植し根の勢力を増さしめんと欲する場合には甲の

鉢より其まゝ土壤と共に抜き去りその周囲や底面の土を削り除け新らしく植え換えんとする鉢の底部に少量の肥土を入れたる後に植物を之れに移し其周囲の空隙の場所に新鮮なる肥土を充たし棒の如きもので突き込むがよい。

茲に此話の終りに述べ可きは例の薔薇園の植え替えを要することである、兎に角薔薇園は植え替えを要するのは事實であつてももし植え替えないと段々根幹が零落して終に枯死するのである、その理は何故であるかは大に研究す可き問題でもし之れが何等かの方法に依つて防ぐことが出来たならばそれこそ薔薇栽培上の一大進歩と云はねばならぬ、余が考ふるにその理は種々ある可きも要するに單に養分の關係のみではなくして、その根から分泌する一種の有機酸の有害作用に基づくものと思はるゝ。

元來すべての植物はその根から一種の自身に有害なる有機酸を分泌するもの

百七十八

であつて之れが爲めに種々なる影響を蒙つておるのである、彼の土中に空氣の流通がないと植物の生育しないのも、一は呼吸作用のためでもあるか知らないが、全くはその根から分泌する然かも根自身に取つて有害なる有機酸を酸化して無害にするために空氣が必要なのである、その有機酸を吸収分解して無害にするのには例の燻炭が最も必要であるといふことを余が偶然のことから発見し殆んど同時に獨逸でも同様の燻炭の効を発見したと云ふことが同國の雜誌に載つたことを見た、之れは昨年のことである、余は未だ蓄薇について多年の経験がないから斷言することは出来ない、恐らく燻炭を用ひたならば蓄薇園は移植しなくとも永久に然かも立派に仕立てることが出来ると思ふ、之れは只の空論ではない、何故に余はかゝることを主張するかと云ふと燻炭を研究する上に於て計らずも発見したことからかゝることに考え及んだのである。

百七十九

多くの農作物例へば茄とか豆類とか胡瓜とか云ふやうな蔬菜類は従來連作を忌むものとしてあつた、乃はち年々同一の土地に栽培してはその結果が極めて良くない、のみならず年々同一地に連作しては到底生育しないから連作をすることは出来ないものとしてあつた、ところが燻炭を用ゆると此連作を忌むと云ふ事實が根本から崩れて燻炭さへ用ゆれば年々連作しても極めて良好なる結果を得ると云ふ實驗が余に依つて発見され各地の農家が之れを實驗して愈々それが事實であると云ふことを確かめ、今では連作を忌むと云ふ作物は何れも此燻炭に由つて救はれることゝなつた。

余は能作物の連作を忌むことゝ蓄薇園の同一地にては段々衰微を見はすと云ふことゝはその理同一であると思ふ、此故に燻炭を用ひさへすれば之れは救ひ得らるゝことゝ思ふ、然かし余は未だ之れについて讀者の前に公言し得る程の

多年の経験を持たないのを遺憾に思ふのであるが余は確信は持つておる。
 自分で實驗はしないけれども、薔薇でも他の能作物と同じやうに燠炭に由つて同一地に於ていつ迄も立派に生育し得ると云ふ確信を持つておる、讀者先づ試みられよ、迷はずに試みられよ、別に多くの費用を要することでもないから躊躇せず試みられよ、余は大に薔薇栽培家に進めるのである。

第十四話 薔薇變咲培養法

本書題して變咲培養法と云ふが如くに主として薔薇の變咲の培養法を述べるのが目的である、然かし一般の薔薇の培養に關することがらを知らなければ變咲を培養することは出来ない、況んや變咲は普通一般の培養法からみるとその方法が困難であるから、前數話に亘つて先づ薔薇一般のことを述べて置いて、

さて茲に主として變咲に關すること、それからそれに關係しておることがら

を述べやうとするのが余の目的である。
 薔薇に限らずすべての植物でも培養されておるものはその優等のものほどその性状が概して虚弱になつておるのは免かれないので従つて變咲の優等なものもを培養するには種々の手當てを施さなくてはならない、さもないと漸次惡變するか或は枯死するに至るのである。

元來變咲を造る方法としては前に述べ來つた人工花粉媒助法だとか實蒔法とか乃至は接木、挿木、芽接法など何れも變性を促がして珍奇なものを得るのであるがその變性は決して不變のものでないのである、いな年々歳々變化して行くのである、薔薇に限らず、すべての草木みなさうであつて、時々刻々に變化して行くのが生物界一般の状態である、而してその變化の惡しき方に向くか

良き方に向くかと云ふことは、その境遇と取扱の工合に由つて定まるのである。

吾等は能くその培養法を盡して之れを良き方に導びかなければならぬのは無論であつて之れを行ふのが乃ち培養法であるのだ、此故に培養法と云ふ中には蓄薇を本圃に移してからの手當のことを主として云ふのである、鉢植ならば鉢に移植してから後のことを云ふのである、云ひ替へれば手入法のことである、いま此手入法について順を追ふて述べることにする。

(一) 培養位置

蓄薇はその性として比較的寒に強く暑に弱きものであるから能く此點に注意して盛夏の候と互寒の手當とはその心得にて培養しなければならぬ、此故に花壇を設けたり鉢物を置くにしても能くその場所を撰ぶことが肝要で春夏の候

に西日の烈しく直射する場所とか風の強く吹き當てる場所とかは良くない、特に東方一面の塞がつたところとか南方が海に面して海風の強き所などは最も避く可きことである、場所では蓄薇は到底生活に堪えないのである、然らばどんな場所が最も良きかと云ふに、

東方一面が開いて西南の二面は叢林に圍はるゝか丘陵を控ゆるか但しは生垣の設けあるか何れにしても此兩面の塞がつておるところ。

でなければ到底充分の發育を遂げて艶麗の花を開くことは出来ないかゝる場所は午前中に充分日光を受けて午後は爽涼に浴するのが常であつて、かゝる場所を第一とするのである、もしかゝる場所が得られなければ特に種々なる方法に由つてかやうにするやうな手當てを施さなければならぬ。

尚ほ土用中は極めて暑に感じ易いもので特に珍奇な變咲の優等のものほど此

傾があるから午前八時頃位まで旭光に浴せしめて其後は葎實を覆ふて日光の直射を防ぎなほ時々灌水を行はなければならぬ、乃ち鉢物には日に二三回位花壇には少くも一回位は水を灌ぐがよいのである、その水は成る可く井水を用ひて極めて稀薄な肥料を溶解せしめたるものならばなほよい。

また冬間は花壇ならば適宜防害の方法を取る可く鉢物ならば特に温度を興える方法を取らなくてもよいけれどもさりとて寒に觸れしめないやうな方法を探つて屋根下か成る可くは室内に容れ置く方法を取るがよい。

右は蓄薇一般に關しての氣候の關係であるが元より種類に依りては特に日光に當てるを必要とするものもある、すでに開花後は元より日光を忌むのであるが未だ開花しない内に日光に當てるを良しとするのは多くの變咲の場合に於て見るところである、兎に角貴重なる變咲は主として鉢植にす可きもので必要に

(二) 肥培方法

應じ場合に應じて適當の場所に持ち運びて適宜の方法を取るのがよい、要するに培養する場所の位置と云ふことは蓄薇に影響を及ぼすことが多いから大いに注意す可きことからである云はねばならぬ。

蓄薇に用ゆ可き肥料の種類とそれからそれを用ゆる方法の大意はすでに前に述べたところであるが、概して花の美大艶麗を欲するものほど多量に施さねばならぬ、前に述べたのは只大体に通ずる一般のことであるが何れの草花でもその品種乃ち變咲に由つて大いにその性状を異にするものであるからそれ／＼その性状に應じて肥培の方法を講じなければならぬ、今一々何れの種類は如何に肥培す可きやと云ふことを述べるわけに行かぬが概して芳香の高き種類とか美大な花を開くものなどは多くの肥料を施さねばならぬ、少なくとも四季